『年報人類学研究』第10号（2020）
Annual Papers of the Anthropological Institute Vol.10 (2020)

不確実性に満ちた環境に寄りそい、動くこと

― フランスにおけるマヌーシュのノマディズムと共同体をめぐる考察 ―

左地 亮子 *

フランスで「ジプシー」や「移動生活者」と呼ばれるマヌーシュは、第二次世界大戦後から定住化を進めつつも、現在もキャンピング・トレーラーに住まい、季節的な移動生活を続けている。なぜ、彼らは、〈動き〉を必要とするのだろうか。それは、非ジプシー社会という、みずからの関与の余地なく変容する不確実な世界を生きぬくためである。

本稿では、フランス南西部ポーに暮らすマヌーシュのノマディズムと共同体に関する民族誌的事例から、西洋の定住民社会内部を生きてきたノマドが不確実性に満ちた環境にたいしてとる構えを描きだすことを試みる。まず、マヌーシュが、定住化の過程で様々な人びとと共住するなかで、「ポーのマヌーシュ」という地縁にもとづく共同体を形成していった様子を辿り、マヌーシュの共同体が非ジプシーの管理下にある環境のなかで偶有性を抱えつつ変動してきたことを指摘する。次いで、近年、こうした境界が不明瞭で捉えにくいマヌーシュ共同体を一つの領土に閉じこめ、「ひとまとめ」にする措置が、ある居住政策を通して徹底されていった状況を追う。ここでは、マヌーシュが地域社会周縁の一地区に集合的に隔離され、「マヌーシュ村」とも呼ぶべき風景のなかに閉じこめられていく過程が浮き彫りになるが、同時に、そのような共同体のゲットー化に抗するようなマヌーシュの移動の実践もみえてくる。「マヌーシュ村」内部の人びとは、季節的な旅を実行し、新たな社会関係を模索することで、押し付けられた共同体の境界を揺さぶる〈動き〉を維持しようとしている。以上の議論から、共同体の境界を固定するのではなく、異なる外部へと開かれながら共同体をつくり変えていくマヌーシュの姿、不確実性に満ちた環境に寄りそい、動く西洋ノマドの構えが照らしだされることになる。

KeyWords

ジプシー
マヌーシュ
ノマディズム
不確実性
共同体

目次

Ⅰ. はじめに
Ⅱ. 調査地概況―フランスのジプシー、マヌーシュ
Ⅲ. 不確実な世界のなかで揺れ動く共同体
　1. マヌーシュにとっての不確実な世界とは何か
　2. 捉えがたい共同体―メンバーシップの境界の流動性
　3. 偶有性を孕む共同体―ポー地域におけるマヌーシュ共同体の形成
　4. 宿営地再編を契機とした分散
Ⅳ. 居住政策とゲットー化
　1. 居住政策の進展―「マヌーシュ村」の誕生?
　2. 共同体を領土化する
Ⅴ. 不確実な世界を生きぬくためのノマディズム
　1. 共同体の境界を変動させる―関係の複数化と有限化
　2. 共同体内部に穴をつくる
　3. 「マヌーシュ村」をめぐる内と外のねじれ
　4. 異種混交的な共在の空間へ
Ⅵ. おわりに

I　はじめに

およそ700万年前、アフリカの大地に誕生したとされる人類は、幾度の波を経て世界中に拡散していく過程で、各々の地域で周囲の環境にある資源を採取しながら、移動のなかに生きてきた。不吉なことや危険を感じたとき、あるいは好奇心や冒険心に駆られて、人類は新たな土地へ動き、移り変わる環境に身をそわせながら生活のあり方を革新させてきた。人類進化学者の海部陽介が述べるように、一種の生物がかくも広く地球上に分布しているのは「生物界全体の中でも異様」なことであるが（海部 2005: 15）、人類の特質は、「身体構造の生物学的進化を待たず」して「文化的な手段を用いて環境の変動に柔軟に対応」してきたこと（海部 2005: 313-314）、つまり、環境の違いに応じて生物学的機能を変えるのではなく、文化的な生活のかたちを変えてきたことにある。

このように文化的創造力をもって、不確実性に満ちた環境に寄りそい生きてきた人類であるが、約1万2千年前、食料の貯蔵・生産の開始と共に生じた「定住革命」（西田 2007）は、人類と環境との関係、人類の不確実性への対処の仕方を一変させた。定住の生活様式が、食料を自然から採集するのではなく、自ら生産、貯蓄し、未来の収穫に向けて土地に投資するという農業の確立により促進されると[1]、それまで環境がもたらすリスクを回避するために移動という手段をとっていた人類は、一定の土地に踏みとどまり、その土地に潜むリスクを予期、制御することへと舵を切った。もはや人類は、災いをもたらすかもしれない超自然的存在や死者、敵対する可能性のある生者を避けて移動するのではなく、それらと一つの土地で共存するべく、関係を調停する社会的な規則や象徴的な意味づけを設けなければならなくなった（西田 2007、本特集「序」）。環境の変化がもたらす問題にたいして移動という解決手段をとるのではなく、あらかじめ環境に潜在するあらゆる危険性を洗いだし、管理、制御する技術を発達させていくことになったのだ。

「遠くを見る」力、「今ここにないものを想像する」力は、他の動物にはないヒト特有の認知能力であるとされる（ドルティエ 2018: 92-93）。たしかに、「今ここではない別のどこか」を想像して動き、環境に満ちる不確実性を回避してきた生活のかたちも、環境管理技術や社会的な制度・観念の体系を発達させることで、移動によって解決できない問題に対処し、不確実性を克服しようとしてきた生活のかたちも、こうしたヒトの特異な抽象的思考の証だ。しかし、定住革命以後、リスク管理社会とも称される社会をつくりだしてきた現代の人類社会では、後者の対応、つまり、リスクを予期し制御することが重要課題とされ、その不確実性の管理がさらなるリスクを生みだすという帰結も生じてきた（cf. 東他（編）2014; ハラリ 2016; ベック 1998）。

こうした人類の歴史と現状にあって、定住という生活様式を自明視する「定住中心主義」（本特集「序」）を相対化する議論が必要になるはずだ。よく考えると、人類は一度も完全な定住に成功したとはいえず、むしろ、移民、難民、避難民、移住者やツーリストといった様々な姿をとりながら動き続けている。したがって、ノマディズムという生のあり方を「人類始原の過去の生き方」としてしまうのではなく、「別様の生き方を探るため」に「人は移動する」という純然たる事実から捉えなおすこと、そうして不確実な世界に身をそわせながら生きてきた人類について丹念に検討することが重要となる。リスク管理社会の陥穽が指摘され、「移動する人びと」をめぐって様々な社会問題が生じる現代にあって、移動を通して不確実な世界を生きぬき、「私たち」の居場所とその境界を動かし続けてきた人類のノマド的生のアクチュアリティを、今一度人類学的に思考する必要がある。

この問題意識のもと、本稿では、西洋の定住民社会の内部を生きてきたノマド、フランスのマヌーシュ（Manouches）のノマディズムと共同体に関する民族誌的事例を検討する。主要な対象は、フランス南西部ポー（Pau）に暮らすマヌーシュである。フランスで「ジプシー」や「旅の人びと（gens du voyage =移動生活者）」[2]と呼ばれるこれらの人びとは、第二次世界大戦後から定住化を進めつつも、今もキャラヴァンと呼ばれるキャンピング・トレーラーに住まい、とても厳しい状況だが、一年のうちの数週間から1、2か月のあいだ、旅の生活を続けている。

なぜ、彼らは〈動き〉を必要とするのだろうか。それは、マヌーシュが彼らの言葉で「ガジェ（*gadjé*）」と呼ぶ「非ジプシー」という他者の世界、つまり、マヌーシュみずからが決めたルールや信じる価値とは無関係に変容していく環境を生き

* 東洋大学

1　農業革命によって定住化が「促進」されたという理解は今日一般的であるが（cf. ハラリ 2016）、西田が縄文人等の非農耕定住民を例に挙げ指摘するように（西田 2007: 35、84-100）、農業は定住生活の「原因」であったとはいいがたい。

2　本稿では以下、この法的カテゴリー名にたいしては、直訳の「旅の人びと」ではなく、「移動生活者」の訳をあてる。後者の方が、現地のニュアンスにより近い（つまり、過度にロマンティックではない）ためである。

ぬくためである。本稿では、生活環境のなかに満ちる不確実性を管理するのではなく、〈動き〉を通して環境の変化に寄りそうことを試みるマヌーシュの「構え」、不確実な世界にたいする「向きあい方」を、定住民社会の論理にもとづく居住地の解体と再編のプロセスのなかで彼らが新たに編みだす移動の実践――ノマディズムという「動きのなかの生」の諸実践――を通して描いていく。

ここで議論される〈動き〉とは、みずからと環境との関係を可動的なものに変えていくための動態的な状態、またその過程で実行される具体的な移動実践を指し、ノマディズムはそのような〈動き〉のなかで生を織りなす技法を意味する。とりわけ本稿では、マヌーシュのノマディズムを共同体との関係に着目しながら検討し、彼らのノマディズムが、単一のメンバーシップや領土の共有により共同体の境界を固定化する絶対的なイズム（主義や体系）[3]を超えて、共同体内外の諸関係を揺さぶる〈動き〉を生みだす特徴をもつことを指摘する。そして、マヌーシュが経験してきた定住化のプロセスと居住政策に伴うゲットー化現象に関する民族誌的記述を通して、共同体の境界を可動させるノマディズムがなぜマヌーシュの生き残り戦術となるのかを考察する。

以下では、調査地概況に続き、まず、マヌーシュにとっての不確実な世界とは彼らをとりまく非ジプシーの定住民社会であることを説明する。そして、ポーのマヌーシュ共同体の形成プロセスを追いながら、定住民社会という不確実性に満ちた環境のなかで変動してきた共同体の特徴を描く。次いで、現在進行中の居住政策のもとでマヌーシュの共同体の囲いこみとゲットー化が生じている様子を述べる。さらに、こうした現状にあって彼らが実行する移動の実践が、共同体内外の社会関係の束を組み換えることで押し付けられた共同体の境界を揺さぶる様子を明らかにする。以上の議論を踏まえ、最後に、不確実性に満ちた環境を生きぬくため、異なるものへの接続の機会をうかがい共同体の境界を可動させ続けている西洋ノマドのノマディズムを、「動きのなかで生を織りなす技法」として論じる。

Ⅱ 調査地概況
――フランスのジプシー、マヌーシュ

フランスのマヌーシュは、欧米諸国において「ジプシー（Gypsies）」や「ロマ（Roma）」の名で知られる集団に属す。一般的にジプシー／ロマとは、10 世紀頃までに北西インドを出発し、その後 15 世紀にヨーロッパ各地に拡散していった人びとの子孫を指す。そして彼らは、インドのサンスクリット語の影響を受けた独自の言語ロマネス（*Romanes*）やロマニ（*Romani*）をもつとされている[4]。しかし、こうした起源や独自の言語使用をもとに世界中のジプシー／ロマを単一民族とする説には異論も多い。ジプシーやロマと呼ばれ、世界各地に散在する人びとは、ヨーロッパに到着してから今日に至るまで異なる歴史を辿り、ヨーロッパ現地社会の様々な人や文化と交わってきたためである。現在、彼らが営む生活は各地域できわめて多様性に富む（図 1）。

日本語の「ジプシー」にあたる名称には、「エジプト人（Egyptian）」に由来する英語の “Gypsy” 系等の名称（フランスの “Gitan”、スペインの “gitano” など）と、「アツィンガノス（Atsinganos、異端者・不可触民の意）」という言葉から派生したとされるドイツ語の “Zigeuner” 系の名称（フランスの “Tsigane”、イタリアの “Zingaro” など）がある。これらはいずれも非ジプシー社会が用い、「浮浪者」や「犯罪者」などのスティグマを押し付けてきた他称である。こうした「ジプシー」の呼び名が内包する差別的な意味を避けるため、今日、欧米諸国や日本では、「ロマ」という総称を用いることが一般的である。しかし、フランスでは、「ツィガン（Tsiganes）」や「ジタン（Gitans）」という日本語や英語の「ジプシー」に相当する名称が、一般社会のみならずジプシー自身によっても総称として使用されている。一方、「ロマ」にあたる仏語「ロム（Roms）」は、中・東欧諸国出自の一部のジプシー下位集団の自称として、また近年では、フランスなどの西欧諸国で外国籍移民として暮らす中・東欧諸国出自のジプシーを指す名称として限定的に用いられる。

フランスのジプシーが「ロマ（ロム）」ではなく「ジプシー（ツィ

3　“-ism” は、「主義」と翻訳され、単独で用いられることも多いが、本来は固有名詞の後について、主義、教義、体制の他、振る舞いや行動のあり方・傾向などの幅広い意味を表す接尾辞である。こうしたイズムの複数的な意味を踏まえ、本稿では、マヌーシュのノマディズムが絶対的な主義としてのイズムをもたない「動きのなかで生を織りなす技法」であることを示す。

4　ポーのマヌーシュを含め、フランスのジプシーは、ロマネスと仏語を日常的に併用する。本稿では、他言語と区別するためにロマネスを斜体で記すことにする。

ガンやジタン）」を総称として使用し続ける背景として、次の2点を挙げておく。第一に、フランスのジプシーは、主にマヌーシュ、ジタン、ロムと自称する下位集団に分かれ（図1）、そのなかでも、マヌーシュやジタンがフランスのジプシー人口の多数派を占めるという事情である。マヌーシュやジタンは、フランスをはじめとする西欧の諸地域（イベリア半島やドイツ語圏地域）に歴史的に長らく（早くて15世紀から）暮らしてきたため、19世紀後半になって西欧諸国に到来し、言語や生活習慣を異にするロマを異なる集団として明確に区別する傾向にある。そして第二に、1989年に始まる民主化の動きのなかで、東欧の諸地域で差別や極度の貧困に苦しむロマが西欧諸国に大流入するにつれ、「ロマ」という名称が「外国籍の貧しい移民」「招かれざるよそ者」という負のイメージをまとわされるようになったことも関係している。このようななか、フランス国民としての権利を主張するマヌーシュやジタンはことさら、ロマと呼ばれ、同一視されることに抵抗感を示すようになっているのだ。

以上の点から、フランスのジプシーの多くが、総称として「ツィガン」や「ジタン」の名を用いるのであり、フランスの学術界や支援組織等もこれに倣っている。本稿でも、このようなフランスでの状況を考慮して、世界各地のジプシーに関しては必要に応じて「ロマ」の総称も併記するが、フランスの文脈では、「ジプシー」を総称として、「ロマ」と「ジタン」を下位集団名として使用する。

また、市民を人種や民族で区別することを避けるフランスでは、特定の民族を指すツィガンやジタンではなく、「移動生活者（gens du voyage）」という生活様式の差異にもとづく集団名も使用されている。この名称は、それまで用いられていた「ノマド（Nomades）」に代わって、1960年代から行政がキャラヴァンなどの「移動式住居」に住むフランス国民を指すために用いてきたものだが、現在では、非キャラヴァン居住者も含むフランス国籍のジプシーの総称として、一般社会およびジプシーのあいだで広く使用されている。ただし厳密には、「移動生活者」は、イェニッシュ（Yéniches）と自称するヨーロッパ土着の移動民をはじめ、狭義（インド起源）の「ジプシー」カテゴリーに属さないキャラヴァン居住者も指すため、本稿では、フランス国籍のジプシーおよび非ジプシーの移動民を包括する集団を指す場合にのみ「移動生活者」を用いる。

このように移動生活者やジプシーと呼ばれる人びとのなかでも、筆者はフランス南西部ポー地域に暮らすマヌーシュを主要対象者とし、2006年から現在まで現地調査を続けてきた。マヌーシュの特徴はその移動生活と居住形態にある。「流浪の民」というイメージに反して、現在世界各地に暮らすジプシー／ロマのほとんどは定住生活を送っている。とくに東欧諸国やスペインなどでは強制的定住政策がとられたこともあって、歴史的に早い時期からジプシー／ロマが定住してきた。こうしたなか、フランスは現在もジプシーがキャラヴァンで移動生活を送っている数少ない国の一つだ。フランスでも第二次世界大戦後の都市化や高度経済成長期を境にジプシーの定住化は進んだのだが、多くの人びと、とくにマヌーシュと自称する人びとが、一年の大半を定住地で過ごしながらもキャラヴァンに住み続け、春から秋の一時期に移動生活を送っている。

ポー地域では、現在、約1,300人のマヌーシュが公営の集合宿営地、私有地、不法占拠地などにキャラヴァンをとめて暮

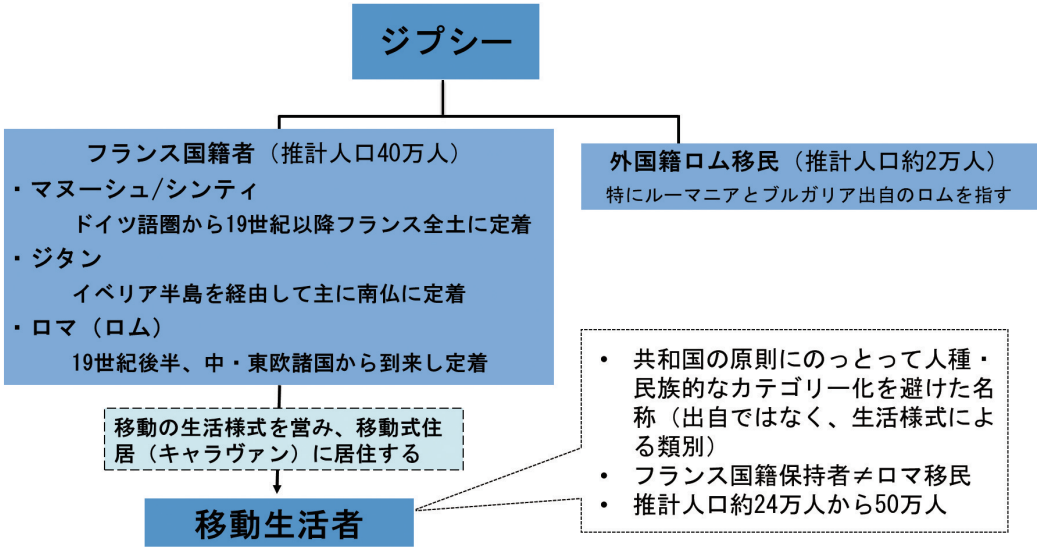

図1　フランスにおける「ジプシー」と「移動生活者」

らす。彼らは、冠婚葬祭に際した遠方の親族との再会、キリスト教の巡礼や信仰集会参加に伴う宗教活動、経済活動を目的として、地域外部で数週間から数か月にわたる季節的な移動生活を行うが、一年の大半はポーに定着している(図2)。

かつては移動生活の主要な目的であったマヌーシュの「移動式の」経済活動が、近年縮小傾向にあることは指摘しておかねばならない。もともとマヌーシュは、移動しながら定住民相手に様々な商品やサービスを提供する経済活動を特徴としてきた。定住化が進行する以前、具体的には第二次世界大戦後から1970年代頃まで、ポーのマヌーシュの家族は、手作りの籠や椅子の訪問販売、椅子などの家具やバイオリンなどの楽器の修理、音楽や曲芸や映画などの娯楽の提供、日用品(針や糸、レース小物)の訪問販売など、多種多様な経済活動を時代と地域のその都度変化する需要に合わせて柔軟に組みあわせることで生活を成り立たせていた。しかし、このような今から半世紀前の時代にマヌーシュが従事していた経済活動は、現在はほぼみられない。戦後のフランスにおける産業構造の変化(第一次産業から第二次・第三次産業への移行、流通市場のグローバル化)や都市化(農村から都市への人口流出)の影響を受け、マヌーシュの経済活動は大きくその内容を変えた。

今日、ポーのマヌーシュが従事する経済活動は、鉄、銅、アルミ、ステンレスなどを素材として含む製品を回収し、転売するスクラップ回収業、一般家庭や工場や企業を訪問し、建物や庭木のメンテナンスなどを行うサービス業、マルシェで衣料雑貨類を販売する市商売、ワイン用葡萄の収穫を主とする季節的農作業などに限定されている。このなかで、広範囲の移動を必要とする経済活動は季節的農作業のみである。ただし、旧来の経済活動が衰退する一方、いまだ識字率も低く[5]、その生活様式や被差別状況から一般社会への参入も進まないポーのマヌーシュ共同体にあって、年間を通して給与取得者として働く人はきわめて少ない。現在、経済活動から得られる現金収入が乏しい状況でマヌーシュ家族の日々の暮らしを支えているのは、失業手当とその他様々な社会保障給付金である。

以上のように、ポーのマヌーシュは、移動から定住へと生活様式の急激な変化を経験してきた。今彼らは、活発な移動生活を維持していたかつての時代のように「移動生活者」としてみずからを規定することも、だからといって定住民社会に参入することもできないという混乱した状況、つまり、(彼ら自身もしばしば口にする)「定住する移動生活者」という両義的な存在として二つの文化の狭間に生きる困難を経験している。そして、次章以降でみるように、定住化は、経済活動の

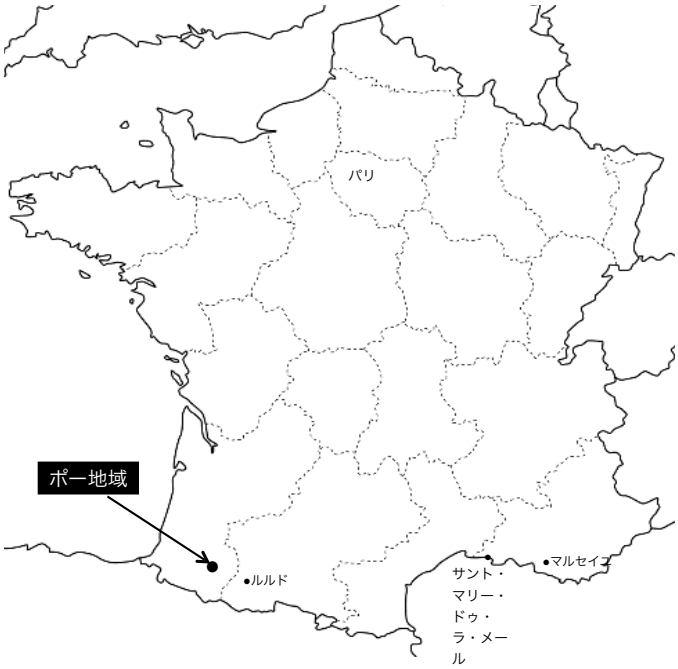

図2　ポー地域

5　ポー地域では、1980年代頃からマヌーシュ児童の就学率が上昇してきたが、それも初等教育に限ったレベルである。現在、マヌーシュの若者たちの圧倒的多数が、中等教育の段階で学校教育からドロップアウトし、その後、公的な職業訓練を受けることもない。識字率も個人差はあるものの、全体的にきわめて低い状況にとどまる。

みならず、移動の生活様式と密接に結びつきながら展開され、マヌーシュの生活をかたちづくっていた社会的な仕組みをも揺さぶり、共同体をめぐる様々な矛盾や葛藤の経験を人びとにもたらしている。

Ⅲ　不確実な世界のなかで揺れ動く共同体

1. マヌーシュにとっての不確実な世界とは何か

マヌーシュは、定住化に伴う変化やひずみを生活の様々な側面に受けながら、定住民からなる多数派社会のなかで独自の生活様式をかろうじて保っている状況だ。では、彼らにとっての環境、不確実な世界とは何であろうか。それは、非ジプシーからなる定住民社会である。マヌーシュは、マヌーシュ以外で、かつ他のジプシー集団にも属さない人間集団、つまり、非ジプシーを彼らの言語ロマネスで「ガジェ」と呼ぶ[6]。「ガジェ」は、多少の音の違いはあるものの、世界に暮らすジプシー／ロマの諸言語に共通してみられる非ジプシーを指す用語である。マヌーシュは「ガジェ」をフランス語で「定住民（sédentaires）」や「農民（paysans）」と訳すが、マヌーシュにとって世界は、ガジェとマヌーシュ（そして同類のジプシー）と大きく二つに分かれる人間集団によって住まわれるものだ。

ここで、ヨーロッパ社会空間とノマド研究における「ジプシー」の特異な位置について注意を喚起しておく。先述のように、現在ジプシー／ロマと呼ばれる人びとの祖先は、中世終期にヨーロッパに現れ、近代化のなかで形成された集団であるとされる。現存する資料は乏しいものの、15 世紀初頭には東西ヨーロッパ各地で、「エジプト人」や「アツィンガノス」に由来する名称をもつ人びとの存在が続々と報告され始める。そして、これらの名称のいくつかは、現在も各現地語で「ジプシー」を表すものとして使用され続けている。

こうしてヨーロッパの様々な地域で「ジプシー」と呼ばれた人びとは、以後、各地域で「非ヨーロッパ出自」の「移動する特異な人間集団」として幾多の排斥や迫害の対象とされていく。本稿ではヨーロッパにおけるジプシー／ロマの苦難の歴史について説明することはできないが、ここで注目しておきたいのは、近代化へと突き進むヨーロッパに現れたジプシー／ロマの生存のありようである。アフリカやアジアの狩猟採集民などの非西洋のノマドが自然の資源を利用するのにたいし、ジプシー／ロマが生きるための資源を採集する環境、つまり「自然」とは、「ガジェ」からなるヨーロッパ社会であった。上記マヌーシュの事例でも触れたように、彼らの経済活動は、移動しながら定住民社会に商品やサービスを提供することを主としてきた。独自に利用できる環境資源も高度な技術ももたないこれらの人びとは、西洋の産業社会が生みだす余剰や人的資源の偏り、隙間に残された経済的、文化的資源を活用すること、つまり、非ジプシーという他者の資源・法・土地に依存することで生きぬいてきたのである。

このように、「ジプシー」は常に西洋近代という他者の世界の不確実性に直面してきた人びとであり、そのことがヨーロッパ社会空間とノマド研究における「ジプシー」の特殊な位置を表している。人類史のなかでは見過ごされがちだが、実は、「採集民→狩猟採集民→牧畜民・農耕民・定住民」という移行図式の後には続きがある。「都市採集民」という現代ノマドである。なかでもヨーロッパの都市採集民である「ジプシー」は、定住民や「近代」がやってくる前に存在していたノマドではなく、西洋定住民社会のなかで生まれてきた、あるいは、「ジプシーとなる」過程ですでに西洋近代を知っていたノマドだといえる。したがって、西洋ノマドとしての「ジプシー」は、高度に産業化した地域でノマドであり続ける、その内部で残された資源を活用しながら生きる仕組みを教えてくれる存在でもあり、「移動から定住へ」という一方向的な人類の進化図式を覆す存在である。

もちろん定住化の圧力は絶えずあった。人類学者 J. スコットが述べるように、近代国家にとって、「読みにくい」対象である「動き回る人びと」に「単一化（simplification）」の手段を適用し、「読みやすい」対象へと変換することは、統治の観点から必要不可欠である（Scott 1998: 1-2）[7]。そうして、これまでフランスでもジプシー管理政策が展開されてきた。たとえば、20 世紀初頭からフランスでは、身分登録制度や宿営地政策を通して、ジプシーの身分と移動を管理する措置がとられてきた（左地 2016）。第二次世界大戦中には、フランスの

6　「ガジェ」は複数形で、男性単数は「ガジョ（*gadjo*）」、女性単数は「ガジ（*gadji*）」となる。一方、マヌーシュを含むジプシーの男（夫）は「ロム（*rom*）」、女（妻）は「ロムニ（*romni*）」である。少年少女（息子／娘）に関しても、非ジプシーとジプシーの区別がなされる（たとえば、非ジプシー男子は "*raklo*"、ジプシー男子は "*chavo*" である）。

7　本書でスコットは、国家が本来複雑で異種混沌的であるはずの自然や土地や人間といった統治の対象を、鳥瞰的なまなざしのもとで整理し、単一化することで、それらを管理しやすいものへと変換する手法を論じている。

ジプシーはノマド・キャンプという強制収容所に隔離されてもいる（左地 2018）。

しかし、こうした歴史的に繰り返されてきた管理政策にもかかわらず、フランスのジプシーはかろうじて単一化をすり抜けてきたともいえる。誰がノマド／移動生活者／ジプシーであり、そうでないのか、国家は現在に至るまでいっこうに、政策の対象者を判別・確定することができないでいる。このことには、ノマド的な共同体の特徴が関わっていると思われる。次にポーのマヌーシュ共同体を事例として具体的に示すように、メンバーシップの境界の流動性という特徴をもつ彼らの共同体は、きわめて捉えがたいものである。マヌーシュは、一見すると「マヌーシュである」という出自の同一性にもとづき共同体を形成しているようにみえるが、その内部には様々な非マヌーシュ出自の人間が含まれ、また共同体を構成する成員も絶えず入れ替わる。彼らはこのように共同体の境界を固定せず可動的に保つことで、生活環境の変化に対応した暫定的なまとまりをつくりだしてきた人びとである。そしてこの種の動態性ゆえ、国家はマヌーシュというノマドを把握することに失敗し続けてきた。対象を確定しないと、統治は効果的に働かないのだ。

2. 捉えがたい共同体
――メンバーシップの境界の流動性

ポーのマヌーシュの共同体の特徴について、筆者は様々なところで述べているが[8]、まず指摘しておきたいのは、そもそも彼らの言語ロマネスには「共同体」を正確に指し示す言葉がないという点である。マヌーシュは、親族集団を超えた共同体的なまとまりを表現するとき、ロマネスで「家族」を意味する「ファミリア（*familia*）」、あるいはフランス語の「共同体（communauté）」という言葉を使用する。

マヌーシュは、地域の共同体的なまとまりを指して、「ポーのマヌーシュ共同体」という表現を用いるが、この「共同体」は、マヌーシュ、ジプシー、移動生活者など、研究者や行政担当者が彼らを語るときに用いる既存のカテゴリーを用いては把握できないものである。正確にはどれにもあてはまらない。なぜなら、ポーのマヌーシュ共同体という「地縁共同体」は、マヌーシュというジプシー下位集団に属す人びとを中心としつつも、ジタンなどの非マヌーシュのジプシー、イェニッシュという非ジプシーの移動生活者も含んでいるためである。先に、マヌーシュが世界をガジェとマヌーシュ（ジプシー）という二集団からなるものと認識している点を指摘したが、実はこの民族境界は現実の生活条件にしたがって修正、交渉されうるものでもある。マヌーシュの共同体には、定住民社会出身の非ジプシーも移動生活の時代から結婚を通して内包されており、定住化が進む現在その割合は増えている（左地 2017a: 58-60）。ただし、「ポーのマヌーシュ共同体」の一員とみなされる非ジプシー社会出身者はみな、親族であるマヌーシュ家族のもとでキャラヴァンに暮らし、男性は定住民社会で雇用の職につくのではなく、マヌーシュの親族と同じくスクラップ収集や季節労働などの経済活動を、女性はマヌーシュ親族と共に家事と育児を協力して行う。そして、この非ジプシーとマヌーシュの間に生まれた子は、マヌーシュの共同体のもとで育つ限りにおいて、マヌーシュの子とみなされる[9]。

このように、「ポーのマヌーシュ共同体」という一見同質的にみえる共同体の内部には、非ジプシーや非マヌーシュのジプシー／移動生活者といった様々な出自の人びとが含まれている。ここで注意したいのは、この共同体は、単一で不変のアイデンティティにもとづいてメンバーシップの境界を固定化するのではなく、ポーという同じ地域でキャラヴァンに住まい、同じ生活環境と社会関係を共有するという日常の具体的な条件をもとに、本来共同体外部に位置づけられる人間を柔軟に共同体内部に受容してきた点である。そしてそこでは、「ポーのマヌーシュ」という集団的境界、あるいはガジェとマヌーシュという民族境界は、マヌーシュとして育ち生きることという、振舞い方や生活のあり方すべてを包摂する社会的、文化的な概念のもとで揺らぎ、修正が施される一方で、その内と外を区別する境界自体は維持されているという点である（左地 2017a: 69-71）。

こうした地縁にもとづく地域独自の集団範疇は、彼らがポー地域にて定着を開始し、その後キャラヴァン居住を通して様々な出自の人びとと出会い、共に過ごすなかでつくりあげ

8　以下のポーのマヌーシュ共同体の特徴、その形成過程に関する記述は、拙著（左地 2017a）第 1 章を一部要約したものであり、具体的事例や詳細はそちらを参照されたい。

9　同様のことが非マヌーシュのジプシー／移動生活者出自の人びとについても指摘できる。ヨーロッパ土着の移動民として主にドイツ語圏地域に暮らしてきたイェニッシュ、南仏を拠点に暮らしてきたジタン、そしてスペインのジプシーは、マヌーシュとは異なる歴史、慣習、言語をもつ。定住化初期の時代、これらの人びとがポー地域でマヌーシュと共住することになったが、当時も現在もポーの移動生活者人口のなかではマヌーシュが圧倒的多数を占めるため、彼ら非マヌーシュはマヌーシュの方法で話し、結婚し、死者を弔うなど、言語や慣習上の差異はマヌーシュとの融合状況のなかで消失している。

られていったものである。そして、この地縁共同体の形成には定住化という生活環境の変化が大きく関わるが、そこにはもとより、マヌーシュの共同体的まとまりが柔軟な集団編成の仕組みをもつことも影響している。移動生活の時代から現在に至るまで、マヌーシュ共同体はメンバーシップの境界を成員の固定化を導く社会制度やイデオロギー的原則により決定するのではなく、むしろ集団の枠組みに柔軟性をもたせ、現実の生活条件にそって様々な他者との融合を可能とする集団編成を特徴としてきた。筆者はこのような「日常の生活条件に応じて集団の枠組みを変化させる」集団編成の原理を「柔軟性の原理」と呼んでいるが（左地 2017a: 46—48）、この原理自体は定住化を経ても変化していない。

このような特徴をもつため、マヌーシュの共同体はその境界が捉えにくくなる。以下では、ポーのマヌーシュ共同体の形成過程を振り返るが、まずはこうしたマヌーシュの集団編成の基本的な特徴を説明しておく。

現在ポー地域に暮らすマヌーシュの両親や祖父母がこの地に到来し始めたのは、1960 年代のことである。それまで、マヌーシュはフランス国内外の広域を活発に移動して暮らしていた。この時代、彼らが形成していた共同体は、親族関係にもとづくものの、恒久的で明確なメンバーシップの境界を定めるものではなかった。

マヌーシュの集団編成の基礎的単位は、一組の夫婦を中心に、その子夫婦や孫たちといった血縁により結びつく数世代の夫婦からなる拡大家族集団である。そして、その拡大家族に血縁や姻戚関係で結びつく複数の拡大家族が融合することで、移動や居住の単位となる共同体的なまとまりが形成される。ただし、この拡大家族とその集合体としての共同体は、流動的でメンバーシップの範囲が捉えがたいものでもある。なぜならそこでは、最小の集団単位としての一組の夫婦と未婚の子からなる個別家族の自律性が重視され、移動と離合集散によるゆるやかなまとまりが維持されるためである。

活発な移動生活が展開されていた時代、移動に伴い旅を共にする成員の一部が抜けたり、普段は別の経路を移動して暮らす親族が合流したりすることで、マヌーシュの共同体は集団編成を頻繁に変化させていた。たいして、定住化の過程でマヌーシュは、地縁をもとにした複数の家族集団の共同体的なまとまりをつくりあげていった。このような特定の定住地を基盤にマヌーシュが新たに形成した共同体は、一見すると共同体の境界を固定化する特徴をもつようにみえる。しかし、個別家族の自律性を認める拡大家族と共同体のゆるやかな連帯という点は、定住化が進んだ現在も変わらないマヌーシュの集団編成の基本的特徴である。たとえば、結婚後、カップルは一方の両親を中心とした拡大家族に合流するが、この選択は永久的なものではない。移動生活の時期や親族の誰かが新たな居住地をみつけた際など、状況に合わせて他地域に暮らす片方の拡大家族と一時的に合流する。つまり、マヌーシュの個別家族は、状況適応的かつ双方的に親族ネットワークを拡大しつつ、生活条件に応じて共同体を選択し、なおかつその選択に一年を通した流動性を残す。

このように、マヌーシュの共同体は、夫婦を中心に双方的に広がるネットワークを特徴とし、多様な人びとを状況適応的に集団内部に受け入れる柔軟性をもつ。その仕組みの上では、共同体の枠組みは自然と拡大し、メンバーシップの境界もあいまいにもなる。

加えて、マヌーシュの社会組織には、共同体の凝集性や連続性を保障するような制度も不在である。父親の権威は限定的で、息子であっても結婚し子をもつ男性は対等である。集合宿営地など複数の家族集団が集まって住むところでもリーダーはいない。そこには、揉め事を解決するイデオロギー的原則も強固にメンバーを縛りつける制度もない。マヌーシュは、個人間での話し合いで解決不可能な対立があるときには、移動するという手段をとってきた。つまり、敵対する人間たちは物理的に離れることで問題解決を試みるので、いさかいを調停する特定の地位や規則を発展させる必要がないのだ。

こうしたメンバーシップの境界の流動性と非集権性が、マヌーシュの共同体をたやすく変化させ、捉えがたいものにする要因となる。マヌーシュの共同体においては、複数の家族が日々の相互扶助や協働を繰り広げ、個別家族の生活を支える一方で、そこに何らかの強制力があるのではない。むしろマヌーシュは、彼らが生きる不安定な社会経済状況のなかで、個別家族ごとに自律的に行動し、集団編成を常に流動的な状態に保つことで、個々の家族の暮らしの安定化をはかる。そして共同体は、こうした個別家族の生活を日常的なやりとりや非常時の扶助等を通して支えるセーフティネットのような役割を果す。

まとめると、マヌーシュは外的状況から自律的に働く社会組織の基礎条件やイデオロギー的な規範や拘束を設けることなく、共同体の境界を常に流動的に保つ。彼らにとって、境界の可動性こそが不安定な生活状況、環境の変化を生きぬく要件になるのだといえる。ポーのマヌーシュの地縁共同体は、このような柔軟な集団編成の仕組みを基礎的条件として、マヌーシュが定住化をめぐる生活環境の変化に促されながら旧来の親族ネットワークの外部にいる他者と地縁という

新たな関係を育みながら創出していったものである。

3. 偶有性を孕む共同体
──ポー地域におけるマヌーシュ共同体の形成

ポー地域では、1960 年代ごろから、フランス全土を移動、あるいは、フランス南東部などの他地域を拠点に移動生活をしていたマヌーシュが定着を開始する。定住化の初期、これらの家族はなお長期間の移動生活を行い、ポー地域にとどまるのは冬季の間だけであった。しかし、都市化の進行によって宿営の場が奪われ、また産業構造の変化により農村を回って様々な商品やサービスを売る経済活動も成り立たなくなるなか、彼らは徐々にポー都市の周辺での定着時期を長引かせるようになっていく。ある 80 代の女性は次のように語る。「ポーに到着しても、しばらくの間は地域内外を移動していた。…中略…しかし、旅を続けることが難しくなり、（一つの場所に）とどまることが多くなった。なぜなら、いたるところに大きな家が建てられ、キャラヴァンをとめる土地がなくなったからだ」[10]。

こうして、1980 年代から、ポーのマヌーシュの移動生活は春から秋にかけての一時期に縮小されていった。この時期、多くのマヌーシュの居住拠点となったのが、1967 年にポー市が移動生活者のために建設した SC 集合宿営地である。この集合宿営地とその周辺には、様々な地域から来たマヌーシュ家族のみならず、ジタンやイェニッシュ、スペインから到来したジプシーなど、様々な非マヌーシュ家族も少数ながら合流していった。

そして、この定住化初期の時代に始まる共住経験をきっかけに、彼らは「地縁」を創出することになった。「私たちは今でこそ別々の場所に住んでいる。けれど、みんなファミリアだよ。だってもともとはみんな同じところに住んでいて、そこで子どもたちが結婚して、それで別々の土地にいったんだもの。会えば挨拶もするし、何か困ったことがあれば助けてやる。だから私たちは共同体っていうんだ」[11]。当時を知るマヌーシュがこう述べるように、定住化が進行した 1967 年から 1996 年までのあいだ、マヌーシュたちのキャラヴァンを受け入れた SC 集合宿営地での共住は、マヌーシュがそれまでの移動生活において一時的に接触することはあっても長期的な関係を結ぶことのなかった人びととの社会関係を新たに開拓する機会となり、地縁共同体の形成に欠かせない経験となった。

先に触れたように、この地縁で結びつく家族集団もまたファミリアだといわれる。この場合のファミリアは、厳密な意味での親族ではなく、ポーでのキャラヴァン居住という特定の経験を長年共有してきた人びと同士の社会的紐帯を指す。ここには地縁にもとづく新たな関係の生成が認められる。従来、離合集散する親族の共同体に生きてきた人びとが、定住化の過程で旧来の親族ネットワークの外部にいる他者との社会関係を新たに結び、地縁共同体を構築したのだ。

このことには、そもそもマヌーシュの共同体が、成員の固定化をもたらす社会制度やイデオロギー的原則を強調せず、むしろ集団の枠組みを可変的な状態に保ち、生活条件にそって様々な他者との融合を可能とする「柔軟性の原理」をもつという点が関わる。そこでさらに注目したいのは、共同体を構成する成員の出入りに関与する事象としての結婚が、ポーのマヌーシュにおいては「駆け落ち」という方法をとることで、彼らの社会関係を地域的な広がりのなかで拡大し、地縁共同体を編成していく要因となった点である。

マヌーシュの駆け落ち婚は次のように展開する。若い男女は周囲に悟られぬよう愛を深め、ある日、連れ立って家族や親族のいる居住地を離れる。そのままカップルは一夜、もしくは数週間から数ヶ月にわたりマヌーシュ共同体から離れて過ごした後、家族のもとへ戻ってくる。親は駆け落ち後に子どもたちの関係と結婚の意志を知るのだが[12]、2 人が戻ってくると結婚の祝宴を開き、彼らにキャラヴァンを与える。そうして新たな世帯が共同体に誕生することになる。

このようにマヌーシュの駆け落ち婚は、当事者以外の人間の関与が少ないという特徴をもつ。しかし一方で、当事者は結婚相手の選択にあたって、生活環境に影響を受けやすいという特徴ももつ。マヌーシュはもとより、親族内婚を強いる固定的かつ排他的な婚姻規制をもたない。移動生活の時代には親族内婚が繰り返されてきたが、これは移動生活のなかでは、若者の配偶者選びが、共に移動する親族集団の内部や行事ごとに再会する親族などにおのずと限られていたためである。たいして、ポー地域では、定住化という生活環境の変化に伴い、それまでの移動生活における親族内婚とは異なった結婚が生じていった。マヌーシュ家族の子が、ポー地域で共住するまでは面識のなかったマヌーシュ家族やジタンやスペイン・ジプシーの家族の子と駆け落ちをするなど、親

10　2006 年 8 月 7 日聞き取り
11　2007 年 11 月 8 日聞き取り
12　駆け落ちは、女性の婚前交渉が厳格に禁じられるマヌーシュ共同体において、処女喪失という既成事実をつくるため、周囲の人間の意志にかかわらず、結婚の承認を導く。

族か非親族か、マヌーシュか非マヌーシュかを問わず、地域内婚が増加していったのだ。そして同様に、定住化が進むにつれ、非ジプシーを結婚相手とするマヌーシュも徐々に増えていった。

こうした生活環境の変化に反応する結婚の仕組みが、定住化の過程で新たな人間関係を開拓し、ポーのマヌーシュというまとまりを編んでいく上でも機能したのである。それは、「戦略」といえるものではない。マヌーシュは、たまたま同じ時代同じ地域で定住を始めた人びとと共住し、婚姻関係を結んだのであり、そもそも彼らはポーに定住しようと思ってやってきたのでもない。移動生活の途中に辿りついた土地で、移動生活が難しくなり、市が彼らに唯一提供した居住地にとどまり続けるなかで、共同体は形成された。つまり、彼らの現在の生活と共同体は、「こうでしかありえない」という「必然性」なく、「別様であったかもしれない可能性」――「偶有性」[13]――を孕むのである。

4. 宿営地再編を契機とした分散

そしていったん形成されたこの共同体は、安定することなく常に変動してもきた。共同体の動きは、約 30 年間マヌーシュのキャラヴァンを受け入れ、ポーのマヌーシュ共同体形成の拠点となった SC 集合宿営地が 1996 年に解体されてからも続いた。

ポー地域のマヌーシュの生活支援に携わる人びとやマヌーシュ当事者の話によると、SC 集合宿営地はその解体まで次のような経緯を辿った。SC 集合宿営地では、定住化の進行に伴い居住人数が爆発的に増加し、設備破損や周辺地帯の不法占拠などを伴うスラム化が深刻な問題となっていたという。居住環境の改善を求めるマヌーシュ住民、たいして公共設備の適切な使用とルール順守を求める市当局は幾度も衝突し、結果、SC 集合宿営地は市から管理を放棄され、「無法地帯（zone de non-droit）」と呼ばれるようになった。その後、マヌーシュ居住地の無法地帯化の問題は常に市議会で議論され続け、都市の拡大という地域政治の事情が最終的な決め手となって、SC 集合宿営地閉鎖が決定された。

これが SC 集合宿営地解体までの大まかな経緯である。この結果、当時 SC 集合宿営地に暮らしていた住民は、さらにより都市の周縁へと追いやられるようなかたちで、地域に新規建設された 4 つの集合宿営地へと分散させられた。しかし、住民のなかには、もう集合宿営地には暮らしたくはないと不法占拠を繰り返しながら生活を続けていくことにした家族、また、地域内部でキャラヴァンをとめる私有地を自力で取得した家族もいた。

以上の経緯を経て、ポーのマヌーシュ共同体は、2000 年代には大小様々な土地に分裂した（図 3）。定住化初期、彼らは自分たちが選んだわけでもない居住地に集住することを余儀なくされ、共同体的なまとまりを形成したが、その後、みずからの関与の余地のない決定に左右されて移住と分散を進める過程で、そのまとまりを変動させてきたのである。

マヌーシュは、共住の経験を通して地域的な共同性を育んできた。しかし、こうした生活環境の変化に敏感に反応する流動的な結合の可能性は、他方で分散の可能性にも結びつく。実際に、マヌーシュはいったん形成された SC 集合宿営地住民のまとまりを解体するかのように、親族単位で各居住地にばらばらに移住していった。その結果、現在では居住地区の違いによって社会関係の濃淡は大きい。とくに、遠い親族関係にあり、なおかつ居住地区を別にする人びととのあいだでは関係が希薄化している。ただし、前節に挙げたマヌーシュ女性の発言のなかで「何かあれば助けてやる、だから私たちは共同体っていうんだ」と指摘されていたように、定住化初期の時代の経験を通して彼らは仲間意識をもちつつ、冠婚葬祭などでは再結集するゆるやかな共同性も維持してきたのである（図 3）。

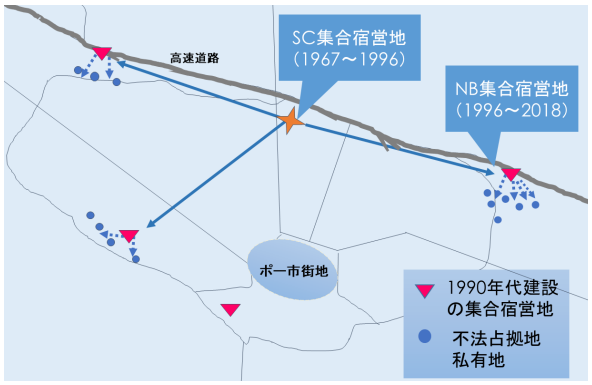

図 3　ポー地域におけるマヌーシュの居住地
（1996 年から 2018 年まで）

このように、マヌーシュは地縁にもとづく共同体を定住地での生活のために必要不可欠な社会的基盤として意味づけつつも、その境界を固定化することはなかった。現実の社

13　ここでは、マヌーシュの生活と共同体が一つの主義や体系にそって唯一の仕方で規定されるのではなく、多様な可能性を潜在させ、変容に開かれている状態を表すために「偶有性（contingency）」という言葉を用いている。この点については、メイヤスー（2016）と里見（2017）も参照されたい。

会的条件にもとづいて様々な近隣集団との融合を促す一方で、流動性や分散をもたやすく導く集団編成の仕組みをもつ共同体は、こうでしかありえないという必然性なく、偶有性を孕むのであり、その境界は変化する生活環境に敏感に反応し変動する。

先にこのマヌーシュの集団編成の仕組みを「柔軟性の原理」と呼んだが、日常の生活条件に応じて集団の枠組みを動態的につくりあげていくその原理が働く限り、マヌーシュの共同体は単一の帰属やアイデンティティにもとづく明確で固定的な境界を設けることはない。これは、共同体の内と外を区別する境界が存在しないということではなく、その都度の生活条件や社会関係の具体性に応じて、境界はひき直され、そこから生成される共同体は、新たに暫定的なまとまりを獲得しつつも、固定されないということを意味する。必然的に、彼らはアイデンティティの政治にも無関心である[14]。それは一方で、彼らのマイノリティとしての地位向上を目指す議論を進めにくくするが、見方を変えれば、その読みにくい動態性ゆえ、国家は「ジプシー」という不確実な対象を飼いならすことに失敗し続けてきたともいえる。そして、マヌーシュの側にしても、共同体の境界を可動的に保つことは、非ジプシー社会という不確実な世界のなかで、日常の具体的な生活条件に対応した新たな社会関係と居場所をその都度みいだす術でもあったのだ。

しかし現在、状況はより複雑である。都市再開発が進むポー地域ではキャラヴァンをとめることのできる土地はますます制限されるようになり、それまで地域内部の隙間に散在して暮らしてきたマヌーシュは、町はずれの一つの地区に「ひとまとめ」にされていった。そして、次にみるように、マヌーシュの居住環境を改善すべく計画された新居住政策は、マヌーシュをある特定の領土をもつ共同体として囲いこむ方向に進行した。つまり、目下、みずからの共同体の境界を可動的に保つことで、不確実な世界を生きぬいてきたマヌーシュにとって窮地ともいえる状況、単一化が進んでいるのである。

Ⅳ　居住政策とゲットー化

1. 居住政策の進展
――「マヌーシュ村」の誕生？

マヌーシュは、多数派である定住民社会の只中でみずからが決めたわけではないルールにしたがって生きざるをえない人びとである。独自の領土や制度、さらには家族集団の連帯を超えた固定的な組織ももたないマヌーシュの共同体は、常に彼らにとって不確実性に満ちた定住民社会の制度のなかで揺れ動き、「そうでしかありえない」という必然性なく、「別様であったかも、あるかもしれない」という偶有性を抱え続けてきた。

こうしたなか、2000 年代後半からポー地域ではさらなる居住政策が進められることになった。それが「適合住宅（habitat adapté）」建設をきっかけとした集合宿営地解体と居住地再編である。ポー地域では、第 1 号となる適合住宅（6 世帯用）が 2010 年に、第 2 号の適合住宅（7 世帯用）[15]が 2015 年に、そして第 3 号適合住宅（41 世帯用）が 2018 年に完成した（写真 1）。

適合住宅とは、「住宅への権利」を享受する上で特別な配慮を必要とする人びとを対象とした一種の社会住宅である。フランスでは主に障碍者や高齢者を対象にした適合住宅が計画されてきたが、移動生活者のように特定の文化的伝統をもつ集団を対象とした適合住宅は他に例がない。これまでの移動生活者を対象とした集合宿営地政策が宿営区画の提供を目的としていたのにたいし、適合住宅政策は、経済的、社会的な理由で住宅をみつけることが困難な人びとを対象に、法的には一般住宅と同様の権利を居住者に保障しながらも、住まいに関する文化的なありように「適した住宅」を

14　この点において、東欧諸国に長らく暮らし、マヌーシュとは異なる歴史と社会組織をもつロマとの差異がみえてくる。ロマ社会では、複数の家族集団から構成される共同体はクンパニアと呼ばれ、父系リネージと夫方居住の制度が厳密に適用される。そして、揉め事を解決する場として、長老議会や集団的な調停の場が開かれる。集団のメンバーシップに関わる結婚に関しては、家族集団の長同士の社会的、経済的な相互関係にもとづく取り決め婚が行われてきた（Sutherland 1986; Williams 1984）。世界諸地域のジプシー／ロマのなかで、みずからの集団の独自の地位や権利を求める運動を活発化させてきたのは、こうした東欧のロマであった。東欧諸国ではロマが第二次世界大戦後から、民族としてのアイデンティティを主張する運動を展開してきた。また、世界のジプシー／ロマの総称を「ロマ」とすることやロマ民族旗の使用を定めた第一回世界ジプシー会議（First World Gypsy Congress: 1971 年ロンドン開催）の中心メンバーとなったのも、東欧ロマ社会出身のエリートと知識人であった。このように、比較的堅固な社会組織をもって、集団のアイデンティティや団結を主張し、国際的な民族運動を牽引してきた東欧ロマにたいし、マヌーシュは、権利獲得運動に集団で従事することもなければ、アイデンティティの政治に強い関心を払うこともなかった。ここには、東欧のロマがその共産主義体制の歴史から定住経験が長く、識字率もマヌーシュから比べると圧倒的に高いという事実も深く関わるが、根底には、共同体をめぐる制度や規範の違いが関与していることはたしかであろう。

15　本稿では、第 2 適合住宅については詳述しない。第 2 適合住宅は、ポー地域のなかでも地理的に他の集合宿営地や適合住宅と離れた場所（第 1・第 3 適合住宅から約 6 キロ、自動車で 15 分程度の移動距離）に立地し、本稿で述べるようなゲットー化の状況から比較的免れているためである。この点で第 2 適合住宅は、社会的統合という目的にそった適合住宅のモデルケースともなりうる重要な事例であるが、事例紹介は別稿に譲りたい。

提供することを目的とする。筆者の調査では[16]、実際に、移動生活者対象の適合住宅として、キャラヴァン設置区画と家屋などの固定式住居からなる混合式のタイプがもっとも多く建設されていることがわかっている。従来型の集合宿営地と大きく異なる点は、適合住宅がキャラヴァン設置区画に加え、衛生設備や台所や寝室等を含む一般的な個人住宅を備えること、また、従来、（法的には住宅として認められない）キャラヴァンに住むために移動生活者が受給できなかった住宅手当の申請が可能となることだ。

写真１　ポー地域第１号の適合住宅、全６軒のうちの一軒（2014 年６月筆者撮影）

適合住宅政策は、十分な居住設備を欠き、スラム化やゲットー化を導くことになった旧来の集合宿営地政策の反省を踏まえ、移動生活者に宿営区画ではなく「適した住まい」を提供することで、彼らの暮らしの向上を下支えしつつ、移動生活者の社会的な「統合」、具体的には教育や就業による社会参入を促すものである。特定の民族的マイノリティを対象に「多文化主義的な」対応をとることに否定的なフランスにおいては、例外的なアファーマティブ・アクションだといえる。

しかし、調査地では目下、この政策がパラドキシカルな状況をマヌーシュたちにもたらしている。以下は、その様子を表す第１・第３適合住宅の実施例である。

【事例１　ゲットー化された共同体をかわそうとする BT 家】

BT 家は、2010 年に完成したポー地域第一号となる適合住宅の入居者である。この適合住宅計画が決定された当時、総勢 30 人を超える成人成員からなる拡大家族であった BT 家には、80 代後半になる老齢の祖母タチアナ[17]とその娘マリアという高齢で身体障害も抱えた２人の女性たちが含まれていた。このような身体に不自由を抱えるメンバーと共に BT 家がポー地域でおよそ 20 年もの間、絶えず移動しながら暮らしていたことが決め手となって、彼らは適合住宅入居者に選出された。

BT 家は、タチアナとその夫の 1960 年代のポー地域到来に始まり、地域内の空き地を転々と移動する生活をしていた。一時は SC 集合宿営地にも暮らし、タチアナの子や孫の多くはそこで結婚し、子をなした。親族は現在も地域内の集合宿営地に居住している。しかし BT 家は、SC 集合宿営地を離れた後の約 20 年間、集合宿営地に住むことを拒否し、「エランス・ローカル（地域的彷徨）」とも呼ばれる地域内移動の生活を続けていた。

BT 家メンバーの説明によるとその理由は、次のようなものだ。集合宿営地のような多くの人びとが混住する環境では、住民間のいざこざが絶えず、窃盗や薬物などの非行に手をだす若者たちが増えてくる。そうした問題から家族を守るためにも BT 家の人びとは、集合宿営地から離れなければいけないと考えたのだという。

こうしたなかで、BT 家は、適合住宅入居者に選出された。彼ら自身も高齢で体の不自由なメンバーがいたためこの移住案を歓迎した。そしてたしかに新しい適合住宅は、大人数での混住と不衛生な居住環境を強いられる集合宿営地とは異なり、キャラヴァン設置区画を備えた拡大家族集団専有の集合住宅で、外観も立派であった（写真１）。

しかし、BT 家の人びとは、入居後すぐさま新たな問題に直面することになった。なぜなら、その新居は彼らが住むことを拒否していた NB 集合宿営地の裏手の土地に建設されたからだ。NB 集合宿営地（上掲図３）とは、SC 集合宿営地閉鎖に伴い、新たにポー市郊外に 1996 年に建設された地域最大規模の集合宿営地である。民家も人の行き来もほぼない町の最周縁に位置し、「移動生活者のゲットー」とも称される。マヌーシュ、一般市民のあいだを問わず、調査地で「もっとも評判が悪い」居住地で、スラムと化した NB 集合宿営地

16　2014 年から筆者は、フランス諸地域にて適合住宅政策に関する現地調査を進めている。本稿では概要を記すにとどめるが、適合住宅政策実施の背景や法的な議論に関しては左地（2017b）を、適合住宅の実態に関する詳細は Sachi-Noro（2017）を参照のこと。なお、次に挙げる BT 家事例は、拙著（左地 2017a）第３章と一部重複している。

17　本稿で挙げる人名はすべて仮名である。

の話題は地元紙の紙面にたびたび登場するので、地域の人間ならばその正確な所在を知らなくともその「悪い評判」を耳にしたことはあるという。設備として備わるのは、トイレとシャワーくらいで、それも150人ほどの人びとが各々4つを共有する状態だ。

このような居住環境に加えて、NB集合宿営地では住民間の軋轢も深刻な問題となってきた。マヌーシュは移動することで、集団編成を柔軟に変化させると同時に、共同体内部の争いを解決していた。しかし、これは、現代のマヌーシュ家族にとっては困難な選択となった。人口過密状態にある宿営地を出て行きたいが、十分な数の集合宿営地を欠く状況で、「他に行くところもないのでどうしようもない」のである。その結果、集合宿営地では、住民間の不和や諍いが頻繁に生じた。その背景は、個人間での交際トラブル、もしくは居住地の使用に関わる家族集団の身勝手な行動など様々で、決定的な理由を突き止めることは難しい。しかし、そもそも大人数の人間に不自由な共同生活を強いる居住環境が彼らに社会的ストレスを与え、不和を避けがたいものにしていた。固定したメンバーでの恒久的で大規模な集住を強いる居住条件は、離合集散的にゆるやかにまとまる共同体を維持してきた人びとに強いストレスをもたらしていた。

BT家は、こうした社会的な混乱と不安に巻きこまれることを回避すべく、集合宿営地を出て、警察の取り締まりのもと日々の移動を強いられる生活を選んできたといえる。しかし、適合住宅政策の実施によって、彼らは改めてゲットーの内部に組みこまれたのである。

BT家適合住宅の近隣には、NB集合宿営地だけでなく、不法占拠地がいくつもある。あるメンバーは筆者にたいし、これらの不法占拠地や集合宿営地に親族がいることを認めつつも、すぐ裏手の土地を占拠しているのは「知らない人たち」でもあって、「（適合住宅で）私たちは私たちと同じ人びとと住んでいる」と強調する[18]。BT家にとって、共住の単位はあくまで適合住宅に住む家族集団であるわけだ。しかし、外部からみれば、BT家は、一般住民の住宅は全く存在せず、周辺に「移動生活者のゲットー」と称される集合宿営地や不法占拠地がある地域最周縁の一地区の住民のようにみえるだろう。

実際に、地元紙のインタビューを受けて、BT家のメンバーは次のように指摘している。「ここに住んでいる限り、移動生活者だとすぐに判明するので、仕事にありつけない。ここには、いわゆる〈ミックス〉というものがない」[19]。ここで言及された〈ミックス〉とは、近年フランスで注目されているソーシャル・ミックス、つまり、「多様な出自階層の人びとが混じりあって住む」という都市政策の概念に近いものと推測できる。BT家の人びともそのような「混じりあい」を求めていたのであり、まさか一般地域住民との〈ミックス〉なしに、スラム化した集合宿営地と不法占拠地の横に隔離されるとは思ってもいなかったわけだ。

以上のように、BT家の事例から、本来、移動生活者の社会的統合を目的としていた適合住宅政策のパラドキシカルな帰結が浮き彫りになる。社会的な統合や〈ミックス〉ではな

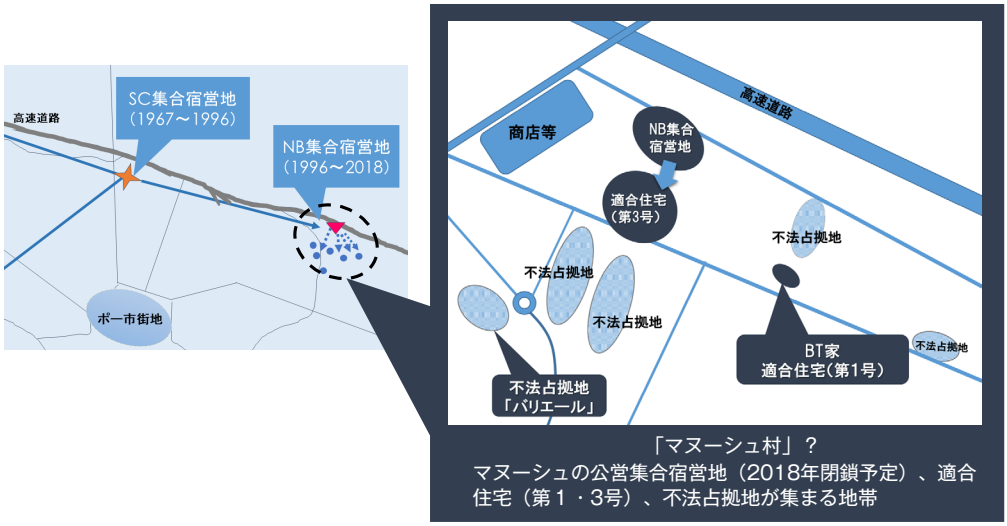

図４　ポー地域の外れに現れた「マヌーシュ村」

18　2014年6月23日聞き取り
19　La République des Pyrénées 2015年2月21日

く、「居住隔離」というべき状況が深刻化しているのだ。しかし、居住隔離による共同体の単一化とも呼べるこの状況は、ポー地域でますます進展している。第3号の適合住宅が、BT家適合住宅と同じ地区の同じ道路沿いに建設されたのである(図4)。この第3適合住宅は、荒廃したNB集合宿営地を適合住宅政策の下で改編するために計画されたもので、NB集合宿営地住民の移住先として、41世帯分の住宅が用意された(写真2)。

【事例2　NB集合宿営地住民の集団移住――2018年完成「新適合住宅」】

筆者が2009年に現地調査を行っていた当時、NB集合宿営地改編計画は、適合住宅を地域の一般住民の居住区内に分散させて建設する方針をとっていた。NB集合宿営地住民も、集合宿営地のような大人数の集住形態では家族間で揉め事が絶えないので、地域内の空き地に分散して移住することを望んでいた。しかし、フランスの有力政治家で現在は民主運動（MoDem）党首であるフランソワ・バイルが2014年のポー市長選挙で当選し、就任すると、NB集合宿営地住民をこれまでと同様の集住単位で、今ある集合宿営地のすぐ裏手の土地に集団移住させるという決定がくだされた。つまり、新居住政策は、分散移住ではなく集団移住というかたちをとり、41軒の適合住宅がBT家の適合住宅と同じ通り沿い、100メートルほど離れた横並びに建設されることになったのだ。

なぜ、またしてもこのような居住隔離ともいえる措置がとられたのかというと、次の点が関わっている。一つ目には、ポー地域で急激な都市化と再開発が進み、土地価格が高騰していたこと、二つ目には、マヌーシュを隣人に迎えたくないという住民感情が強かったこと(それゆえにポー市はバイル市長就任以前まで分散移住先の土地を確保することができないでいた)がある。それらを考慮して、バイル市長は新たな措置を打ちだしたのだ。つまり、ジプシー居住政策をめぐる政治家と住民の思惑や反応が、「地域社会内部の異質な外部」としての新たな風景、マヌーシュ・ゲットー形成を導いたといえる。

バイル市長は2018年3月の適合住宅見学会の際、次のように満足そうに語っている。「これはまさに、それぞれの家族の歴史と思い出がつまった本物の村（vrai village）だ」[20]。マヌーシュ自身は、大集団でゲットーとして悪名高いこの地区に引き続きとどまり、このような「村」を形成すること望んでいなかったにもかかわらず、である。

以上から明らかなように、この二つ(BT家とNB集合宿営地）の適合住宅政策はゲットーを大規模再編することで、マヌーシュを地域社会に溶けこませるのではなく、隔離する方向に向かっている。図4（右）は、NB集合宿営地（2018

写真２　完成した第３適合住宅　（2018年９月筆者撮影）

20　La République des Pyrénées 2018年3月2日

年中に閉鎖、高速道路サービスエリア建設予定)、複数の小規模な不法占拠地、そして適合住宅(第1・第3号)が集まる地区の様子である。この地図内には、一軒も非ジプシーの民家は存在しない。たしかに、「マヌーシュ村」とも呼ぶべき新たな風景がポー地域周縁に現出したのである。

2. 共同体を領土化する

このように、本来、マヌーシュの社会的統合を目的としていた居住政策の進展によって、ポーという地域社会の内部に異質な外部がつくりだされた。これは単一化の論理にもとづく統治管理と呼ぶべき事態といえよう。そもそもフランスは、一にして不可分な共和国という原則のもと、市民に出自や民族や宗教等の差異を捨象した抽象的個人として国家と直接的に向きあうことを求め、国家と個人のあいだに特定の集団を設定する共同体主義を、個人を集団に閉じこめ、個人の自由と平等を侵害するものとして強く警戒してきた(cf. 左地2016)。しかし、今マヌーシュのもとでは、マイノリティによる、つまりマヌーシュから発せられた共同体主義ではなく、マジョリティによるマイノリティの共同体への封じ込めというべき状況が生じているのである。

筆者はこれまでの調査のなかでしばしば、マヌーシュをはじめとする移動生活者を「彼らを共同体主義的だ」「彼らは彼らだけでまとまっている」と一般のフランス人が表現する意見を耳にしてきた。一般市民が普段メディアや日常生活で目にするのは、移動生活者が大家族で複数のキャラヴァンでもって郊外の空き地や宿営地で移動したり暮らしたりする様子であるため、核家族化が進んだフランス社会一般と対比させたこの種の見方が生まれるのである(したがって、ポー市長は集団移住がNB集合宿営地住民当事者たちにとっても「良いこと」なのだと誤解していた可能性もある)。

同様の意見は、図5の調査結果からも読みとることができる。このデータは、フランスの全国人権諮問委員会(CNCDH)が2013年度報告書で挙げたもので、移動生活者、ロマ、ムスリム、マグレブ系移民、アジア人、ユダヤ人、黒人等の各集団が「社会のなかで孤立している集団」であるか否かという質問にたいするアンケート回答をまとめたものである。このなかで、移動生活者やロマは、社会的孤立集団として真っ先に挙げられている。こうしたイメージからも、彼らには常に共同体主義のイメージが付与される。

しかし、すでにみてきたように、非集権的で離合集散性を特徴とするマヌーシュの共同体に関しては、個人を共同体の内に閉じこめるという共同体主義のイメージはそぐわない。ここでマヌーシュの共同体のありようを映しだす事例として、2018年の調査中に筆者が立ち会った次の出来事を挙げておきたい。

【事例3　救命病棟に集うファミリアたち】

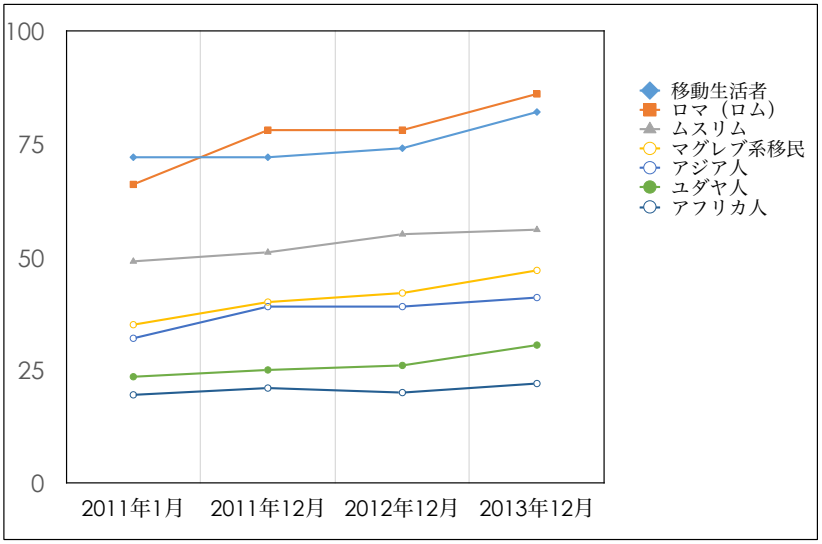

図5　「社会のなかで孤立している集団」に関するアンケート
フランスの全国人権諮問委員会（CNCDH）2013年度報告書掲載データ
(2014: 203, 465-466）をもとに筆者作成

2018年9月のある日、ポーのマヌーシュの男の子が鉄砲玩具による自損事故で救急に運ばれ、生死の境をさまよったときのことである。少年が病院に運ばれたことを電話で伝える一報から一時間後の20時頃、筆者はマヌーシュの友人たちと病院に到着した。すると、救命病棟の周囲にはすでに100人弱が集まっていた。みな少年のファミリアだという。少年の手術が終了した翌朝4時半頃までのあいだ、多いときで300人近くに達しただろうか、少年のファミリアで病棟は囲まれた。病院の駐車場はマヌーシュの車ですぐに満車となり、病棟の周囲も路上駐車であふれた。車と人の混雑具合にみかねた病院スタッフがマヌーシュたちのもとに何度か注意を告げに来るのだが、ファミリアの数は増え続け、みな帰ろうとはしない。何をしているのかというと、ひたすら少年の様態についての情報を収集、伝達し、話し合うのだ(「肺に穴が空いたのよ」「蘇生を試みたそうだ」「ボルドーに運ばないといけないかもしれない」「医者が揃って会議をしている」「一刻を争うんだ」etc...)。そしてその内容を、電話で逐一「今ここに集うことのできないファミリア」にも伝達する[21]。

このファミリアの光景は、たしかに一般のフランス人にマヌーシュの共同体的まとまりを強く印象づけることだろう。しかし、彼らはこうして様々な機会に集結し、個人を共同体的紐帯のなかに強くつなぎとめる一方で、その共同性を維持していくために、自分たちだけの領土や村を欲しいとは考えない人びとでもある。むしろ普段は散在していて、個人の生と死に関わる出来事(出生、洗礼、傷病、葬礼)に際して集結することを重要視する。筆者自身もしばしば驚かされることであるが、日常では、同じ居住地に住んだりしていると揉めてばかりいたり、そうした諍いを避けるために互いに関わりあおうとしない家族間や個人間であっても、こうした特定のモーメントに共同性の強度をみせつけるのだ。

常態としては分散的で暫定的なまとまりしかみせず、ただし特定のモーメントに集結する、このようなマヌーシュの共同体にフランスで警戒される共同体主義のイメージを重ねあわせることはできない。そうした共同体に特定の領土を与えることも不要である。しかし、今日、単一化にもとづく統治管理によって、マヌーシュのように分散的な対象、あるモーメントにしか集結しない流動的な対象を読みやすい対象に変換すること、不明瞭な共同体の境界を領土の固定化によって確定する、つまり「共同体を領土化する」手法がとられている。「彼らは共同体主義的だ」「彼らは彼らだけでまとまっている」というイメージは、こうしてマヌーシュの側からではなく、彼らを周縁に「ひとまとめ」にしていく多数派社会の側から生みだされ強化されて、マヌーシュに押し付けられている。これが現在、マヌーシュが居住政策の名で直面している単一化という現象である。

以上、ポーのマヌーシュの共同体が、適合住宅をめぐる新居住政策を通してゲットー化されていった状況を述べてきた。これを踏まえたうえで、次に、そうした現状でマヌーシュがどのように〈動き〉を実行しているのかという点を検討する。ここでは、2014年から筆者が毎年数週間から約一か月間のスケジュールで実施してきた現地調査によって得られた情報を主にとりあげる。それにより、ゲットー化状況に直面するポーのマヌーシュが、現在も統治管理のターゲットとなる定住地にとどまりつつも、みずからと環境との関係を可動的なものに変えていくための〈動き〉を編みだす様子がみえてくる。

V 不確実な世界を生きぬくためのノマディズム

1. 共同体の境界を変動させる
——関係の複数化と有限化

本章では、ポーのマヌーシュ共同体の近年の動きと移動の実践を追いながら、人びとが地縁共同体内外の関係を複数化、有限化しながら、自分たちが構成する内と外にある社会関係を組み変え、共同体のまとまりを動態させている様子を探る。

まずもっともシンプルな例から挙げていく。それは季節的な移動、つまり、定住地を離れて、一時的な旅に出るという実践である。筆者はこれまで、「定着のための土地」とマヌーシュが呼ぶ自分専用の土地や家を保持する家族が、集合宿営地や不法占拠地という専有が認められない居住地に住む家族よりも活発に移動生活を行っている様子を観察してきた(左地 2017a)。家や私有地という定住民的な居住環境をもつことは、一見すると「完全な定住化」を意味するようにみ

21 2018年9月12日フィールドノーツより抜粋

えるのだが、実は、家や土地の所有という定住民社会の制度をとり入れることで、「自由に出発し戻ってくる」という移動の条件が整い、旅の実践はむしろ活発化する。合法、非合法を問わず宿営地を確保することが困難な現代において、キャラヴァンでの移動の出発点となり、その帰着点としてマヌーシュ自身が自由に扱える家や私有地は、移動生活の必要不可欠な条件となっている。同じことが、適合住宅に住むようになったBT家にもいえる。

【事例4　適合住宅移住後のBT家の移動生活】

2014年から毎年、筆者はBT家の適合住宅を訪れ、メンバーの近況報告を受けているが、彼らはしばしばうれしそうに最近経験した「旅（voyage）」の話をしてくれる。ルルドというポー地域から車で40分程度の近距離にあるカトリック巡礼地で一週間程度過ごすこともあれば、親族の暮らすパリやポルトガルといった遠方の地域にまでキャラヴァンで出かけていくようになったという。身体の不自由なメンバーを抱えて地域の空き地を転々と移動する以前の生活では、長期的で遠方まで赴く旅を実行することは難しかった。しかし、今や適合住宅という、いつでも好きなときに出発して戻ってくることができる家族集団専用の住宅があるので、旅の範囲が地域から格段に広がっているのだ。

あるメンバーは、次のように現在の生活を語る。「私たちはキャラヴァンを保持している。旅に行くために。今、私たちは旅をすることが少なくなっている。それでも家族に会いに行ったり、ヴァカンスに行ったりして旅をする。それが私たちの習慣なのよ」[22]。

このように、BT家はゲットー化された普段の生活とは異なる環境を開拓し、遠方の親族との関係を維持しつつ、定住地の限定的な社会関係に閉じられない関係を探索している。適合住宅への定住を契機として移動生活を再活性し、定住地の外へと社会関係を複数化することで、BT家は「マヌーシュ村」という押し付けられた共同体の境界を可動的なものに変えるのである。こうした事例はもっともシンプルで、ポー地域において頻繁に観察されるものである（cf. 左地 2017a; Sachi-Noro 2017）。マヌーシュは、定住化をめぐる社会変化のなかで旧来の親族関係を超えた地域的な共同性を育み、居住政策の進行に伴い一つの領土をもつ共同体として単一化されてきた。しかし、そうしたプロセスのなかで、彼らはノマディズムのあり方を再編することにより、「ポーのマヌーシュ」という単一の帰属への傾倒や固定化へと結びつかない複数的な共同性を地域外部にて模索する。家や土地の所有という定住民社会の制度から脱出するのではなく、その制度内部にありながら実現可能なノマディズムを通して、「今、ここ」とは別様の共同性を模索するのである。

この点を踏まえた上で、次にやや複雑な〈動き〉にも注目したい。図4（右）に挙げた「マヌーシュ村」地図内では、バリエールと名づけられた不法占拠地を掲載している。この不法占拠地の住民に着目することで、マヌーシュの共同体の〈動き〉は、現在の関係に複数性をもちこむという意味で絶えず開かれているベクトルのみではなく、現在の関係に分断線を引き入れるというベクトルを通しても維持されている様子がみえてくる。

写真3　バリエールのキャラヴァンと馬　（2016年10月筆者撮影）

22　2014年6月23日聞き取り

2. 共同体内部に穴をつくる

「バリエール」とはフランス語でバリアや障壁を意味する言葉で、これは地元のマヌーシュがこの不法占拠地につけた通称である。この奇妙な名前は、昔この土地の入り口にキャラヴァン侵入制限のバリア（柵）が建てられていたことに由来するという。今は外されているが、まだその名のイメージは残っている。この不法占拠地の周囲は木々でとり囲まれ、入り口には回収用ゴミ箱が複数並べられているため、外から内部の様子をうかがい知ることができない仕組みになっている、つまり、いまだバリアを備えているような居住地だからだ。

ポー地域の不法占拠地の多くは、こうしたバリアをもたず、開けた土地で行き交う車や人びとのまなざしにさらされている。たいして、バリエールは公営の宿営地のように閉ざされている。それがある程度の生活の安定を可能にしたと思われ、不法占拠地にもかかわらず、現在はバラックがいくつも建てられている。また、NB 集合宿営地とは異なり、今のところは人口過密状態にも至っていない。ある家族がポニーを 2 頭買い与えたので、バリエール住民の子供たちは広々とした緑地で乗馬を楽しむこともできる（写真 3）。

外部からの侵入者を拒むように並んだゴミ箱を通過して、こののどかで、ひと昔前の農村を想起させる風景を目にしたとき、筆者はとても驚いた。筆者がこれまで地域でみてきた不法占拠地や集合宿営地とはきわめて異質な風景であったためだ。それは、まるで「マヌーシュ村」というゲットーの内部に穿たれた「穴」、あるいは「外部」のようにみえた。

しかし、そもそも、バリエールに暮らしているのは、人口過密状態の NB 集合宿営地からあふれた人びとであり、彼らはポーのマヌーシュ共同体、そして「マヌーシュ村」に長らく暮らしてきた人びとである。また、第 3 適合住宅への移住以前、バリエール住民の親やキョウダイをはじめとする近親は NB 集合宿営地に残っていたため、バリエールと NB 集合宿営地の住民は、共に食事をしたり、育児や家事を手伝ったりなどの日常的な相互扶助関係を維持してもいた。実際には、バリエールは異質な外部であるどころか、ほとんど毎日のように、バリエールと NB 集合宿営地のあいだでは住民の行き来があったのだ。

ただし、日常的な社会関係としては連続していた NB 集合宿営地とバリエールであるが、関係の分断と呼べる状況が生じてもいた。現在バリエールに暮らす住人の多くは、2010 年代初頭からこの不法占拠地に暮らしてきたが、2018 年に完成し、親やキョウダイが移住する予定の適合住宅には「一緒には行かない」と移住を拒否していたのである。筆者は、市当局の提案に応え、ごく自然に彼らは移住を受け入れるものだと考えていた。適合住宅では、充実した設備を備えた居住環境のなかで近親と共住することができる（それらは彼らがいつも「理想」として挙げる居住条件だ）。たいしてバリエールは、衛生施設にも欠き、いつまで不法占拠状態が黙認されるかもわからない状況であるからだ。そこで、「なぜバリエールにとどまるのか」と筆者が理由を問うと、次の答えが返ってきた。「（同じ親族でも）NB 宿営地住民には一緒には住みたくない人たちがいるから」「ここにはもっと自由があるから」[23]。

こうして、NB 集合宿営地と周辺の不法占拠地からなる「マヌーシュ村」のなかに、分断線が引き入れられた。このバリエール住民の移住拒否という決断は、当初筆者にとって意外なものであったが、同様の決断が、新適合住宅への移住対象者とされていた一部の NB 宿営地住民たちのあいだでも生じていたことが後に判明した。NB 集合宿営地住民皆が移住を受け入れたのではなく、いくつかの家族は移住を拒否したのだ。

第 3 適合住宅が完成し、住民の引っ越しが終了した後の 2018 年 9 月、筆者は NB 集合宿営地を訪れた。すでにがらがらになっていると予想していた NB 集合宿営地には、まだ 80 人ほどが暮らしていた（彼らのなかには、ポー地域内の別の不法占拠地から空きが出た NB 集合宿営地に一時的にやってきた家族も含まれている）。もちろん、彼らはみな、正確にはいつになるかはわからないものの、ひと月から数か月後には NB 集合宿営地が解体されることを知っていた。宿営地解体の折には、地域内の空き地を転々とする生活を送るしかないと、1996 年から NB 集合宿営地に暮らしてきた住民は述べた。

このように、バリエール住民や一部の NB 集合宿営地住民は、適合住宅には「一緒には行かない」と選択した。彼らは、第 3 適合住宅の進展のなかで、NB 集合宿営地を中心として築かれていた地域の家族間の社会関係のなかに一種の分断線を引き、既存の繋がりに限界を設けたのだといえる。過去を遡れば、SC 集合宿営地解体の折にも新集合宿営地への移住を拒否した家族がいたことが思い起こされる。このときと同じく、新居住政策はマヌーシュの共同体に〈動き〉をもたらすものとなった。適合住宅政策は地域のマヌーシュ

23　2016 年 10 月 16 日聞き取り

を特定の領土内部に「ひとまとめ」にし、単一化するものであったが、実際にはこの政策実施のプロセスからは新たな分散の契機が生みだされていたのだ。

マヌーシュの柔軟な集団編成が旧来の関係の外部にいる他者との融合と共に、分散の可能性をも促すことは先に指摘したが、ここでも同様のことがいえよう。マヌーシュは、既存の共同体の境界の外にある関係を新たに模索し、社会関係を複数化すると同時に、そこに限界も設ける、つまり関係を有限化する。繋がることと分断すること、この二つの異なるベクトルの力が共同体の境界を可動させる〈動き〉となるのだ。

3.「マヌーシュ村」をめぐる内と外のねじれ

以上、「マヌーシュ村」に暮らす人びとが地縁共同体内外の関係を複数化、有限化する状況について述べてきたが、続けて、バリエールにおいてさらに特筆すべき〈動き〉がある点を指摘したい。それは、バリエール内部で、キリスト教カトリックからプロテスタント新派ペンテコステ派への改宗が急激に進んだことだ。

世界諸地域に暮らすジプシー／ロマと同様に、フランスのジプシーは従来特定の信仰をもたず、彼らが生きる多数派社会の信仰する宗教を選びとってきた。したがって、フランスのジプシーのあいだでは、現在でもカトリック教徒が多数を占めるのだが、近年は、プロテスタント教会の一派であるペンテコステ派に改宗する人の数が急増している。ペンテコステ派は、1900 年頃にアメリカで始まった聖霊運動から生まれ、今ではアフリカや南米などの貧困にあえぐ社会で急激に改宗者を増やしている。フランスのジプシーのあいだでは、1952 年にノルマンディー地方を旅するマヌーシュ家族が最初に改宗したとされ、1957 年には「ジプシー福音宣教会（Mission Évangélique des Tziganes）」が設立されている。

ペンテコステ派運動がフランスをはじめとするヨーロッパ各地のジプシー／ロマの間で急速に広まった背景として、新たな信仰が民族的アイデンティティ覚醒を促した点を挙げることができる。都市化と産業化の波にさらされ、周縁化が進む現状において、魂の救済を掲げ、新たなより所を与えてくれるペンテコステ派信仰は、差別や貧困といった困難な現実を「神に選ばれし民」が辿ってきた受難の歴史と重ねあわせ、肯定的な価値へと変換したという。加えて、ペンテコステ派普及の背景には、奇跡などの神秘体験告白や異言や音楽などで感情を刺激する信仰実践の特徴、さらには、ジプシー福音宣教会がジプシー／ロマ共同体のなかから牧師を募り、共同体内部での布教活動を重視してきた点も関係する。

地域差もあり、改宗者の具体的な割合はわからないが、今日フランスのジプシーのおよそ 3 分の 1 から半数が「エヴァンジェリスト（évangeliste）」と自称するペンテコステ派信者だとされる。ただし、ポー地域、とくに NB 集合宿営地とその周辺に住むマヌーシュはカトリックを信仰し、親族のなかにはローマ法王と面会した人物もいるなど、カトリック信仰に誇りをもつ人びとが多いことが特徴であった。筆者が 2007 年から 2009 年の間に長期調査を行っていた時期、少なくとも NB 集合宿営地の住民は全てカトリックであり、ポー地域内の他の集合宿営地で進んでいた改宗の動きにたいしては、「マヌーシュの伝統を否定するもの」「私には関係ない」といった否定的な意見が挙がっていた。

したがって、2017 年のある日の夕食の際に、「もうマリア様にお祈りをささげることはない」と NB 集合宿営地在住のカトリック教徒であった女性がふと口にしたとき、筆者は心底驚いた。この発言は、マリア崇拝を禁じるペンテコステ派信者に特有のものであったからだ。彼女は、この当時はまだ「私は改宗をしない」と述べていたが、バリエールに暮らす親族が改宗したこともあり、新たな信仰へと心を揺らがせていた[24]。

そしてすでにこのとき、以前は地域に一つしか存在しなかったマヌーシュのペンテコステ派教会が新たにバリエール内に建てられていた。簡素な手作り小屋であるが、地域内外から牧師がやってきて毎週 2 回の定例集会と日曜ミサを行うようになった。そしてその信仰熱が徐々に外部に浸透していくかのように、2018 年 9 月の筆者の調査時には、バリエールに移住した家族の圧倒的多数が、そして新適合住宅に移住した家族までが改宗を進めていることが判明した。バリエールが誕生した 2010 年頃から 10 年も経ないうちに、NB 集合宿営地周辺に住む住民のあいだで改宗者が続出し、地域人口の 3 分の 1 ほどであった改宗者が今では半数を超えたのではないかと推測できるまでにその数は増加している。

マヌーシュたちの説明を総合すると、はじまりは、NB 集合宿営地ではなく、バリエール内部で 1 人 2 人とイモヅル式に改宗が増えていったようだ。たとえば、あるマヌーシュの DR 夫妻からなる DR 家には成人した 5 人の娘がいたが、そのうち 2 人の娘がバリエール移住後に改宗をしたことをきっかけ

24　2017 年 8 月 29 日聞き取り

に、当時 NB 集合宿営地に住んでいた残りの姉妹 3 人と夫婦自身も改宗を考えるようになった。バリエール在住の姉妹の改宗の背景には、2 人の夫がそれぞれに、その親族を含めペンテコステ派信者であったことが関係している[25]。その一方で、DR 夫妻と NB にとどまっていた姉妹（1 人はカトリックの夫と結婚し、残りの 2 人は独身）はカトリックであり続けていた。しかし、2018 年 9 月に筆者が再び彼女たちのもとを訪れると、娘 2 人は DR 夫妻と共にすでに NB から適合住宅に、もう 1 人は NB からバリエールに移住していたが、3 人ともバリエールのペンテコステ派教会に毎週通うようになっていた。そして、DR 夫妻自身も、改宗を考え始めているとのことであった。

このように、現在の「マヌーシュ村」では、バリエールを基点にペンテコステ派改宗の動きが広がっている。先に触れたように、世界諸地域におけるジプシー／ロマのペンテコステ派改宗の動きは、これらの人びとが第二次世界大戦後から経験してきた社会的、文化的変容の影響を受けて活発化してきたのであり、同様の過程が遅ればせながらも、ポー地域のマヌーシュのあいだでも生じているのだといえよう。

もっとも、ポーのマヌーシュの文脈においてとりわけ重要なのは、改宗は旅の実践に変化をもたらし、定住地外部の社会関係の差異化にも繋がる点である。カトリック教徒が大多数を占める過去の時代から、マヌーシュは信仰実践に伴う旅を行ってきた。普段地域の教会に足を運ぶことのないカトリックのマヌーシュであっても、聖地巡礼を重要視し、今でもポーのマヌーシュの多数が、ピレネー山脈の麓にあり、「奇跡の泉」で知られる聖地ルルド、そして毎年 5 月に「ジプシー巡礼祭」が開催される南仏カマルグ地方のサント＝マリー＝ドゥ＝ラ＝メール（図 2）へと巡礼に行く[26]。巡礼は、マヌーシュの移動の生活様式と密接に結びついた宗教活動であり、単に信仰を確認する機会であるばかりでなく、彼らが伝統的に従事してきた移動式の経済活動（露天商や芸能の仕事）、そして普段は遠く離れた地域に暮らす仲間や親族が集結する機会ともなってきた。

そして、このカトリック巡礼と同様に、ペンテコステ派でも旅を伴う信仰実践が重要な位置を占めているのである。世界他地域で共通するものではないが、フランスにおけるジプシーのペンテコステ派の信仰実践は、ジプシーの牧師に率いられて信者が諸地域をキャラヴァンで移動していくことに特徴がある。とくに、5 月から 9 月にかけてフランス各地で開催される大規模な信仰集会には、数千台ものキャラヴァンが全国から集合する。カトリックのように特定の聖地を訪れるのではない。普段離れた地域に暮らす信者が集結し、共同で信仰実践を行う機会として、夏季の信仰集会は重要な行事となっている。

したがって、バリエールの住民は、「もうルルドには行かない」、かわりに「信仰集会に行く」と述べるようになった。この旅先の変化は、カトリックにとどまるポー地域、そして遠方に暮らす親族との付き合いとの分断という重要な意味をもつ。もはや近親間でさえ、長らく続けてきたカトリック聖地への旅を共にすることがなくなるのだ。しかし他方で、この旅先の変化は、ペンテコステ派に改宗した別の親族やそれまで関係を結ぶことのなかった人びとや他地域のジプシー共同体との新たな関係の構築という意味ももつ。たとえば、先に挙げたバリエール在住の DR 家姉妹たちは、カトリックにとどまる DR 家側の旧来の親族ではなく、ペンテコステ派信者が多数派を占める夫側の親族と共に旅に出かけ、一年の一時期を共にキャラヴァンを並べて過ごすことになったのである。

ここから、宗教活動もまた地縁共同体内の社会関係を一部で分断し、別の外部の関係へと接続する実践となり、共同体のまとまりに可動性をもたらすことが指摘できる。先に述べたように、筆者は最初、緑地に馬とキャラヴァンが並ぶバリエールのノスタルジックな風景をみたとき、「マヌーシュ村」というゲットーの風景内にできた「穴」、異質な外部に入りこんだ印象を受けた。「マヌーシュ村」はポーという地域社会内部にできた外部のような空間であるが、その外部の「穴」、あるいは「さらなる外部」としてバリエールが出現したのである。そしてそのバリエールの住民が、はじめに改宗という新たな世界に参入し、旧来とは異なる旅の実践を通して別の「外部」へと接続しようとしていった。さらに、今ではその動きが旧 NB 宿営地住民間、この「マヌーシュ村」地区のなかに徐々に浸透している。内と外が反転してねじれあって複層的な入れ子

25　改宗者の男女比率は不明だが、牧師は男性であり、男女の空間的分離が重視されるマヌーシュ共同体にあって、家族のなかで男性が先に改宗し、女性は親族の影響を受けて改宗に向かうというケースは比較的多いように思われる。

26　ルルドは、世界中のカトリックが集う国際的な聖地であるが、サント＝マリー＝ドゥ＝ラ＝メールはジプシーと彼らの守護聖人を巡礼の主役とする特別な聖地である。この町の教会には、イエスの磔刑後、迫害を逃れてパレスチナからこの地に到来したとされる 2 人の聖母マリア（ヤコベとサロメ）の聖遺物と共に、もう 1 人の聖母として、ジプシーの守護聖人サラの石膏像が地下礼拝堂に設置されている。サラはマリアたちの召使とも、あるいはマリアたちをカマルグの地に迎え入れたジプシーの王女とも伝えられる。サラ像やサラ信仰の起源は不明だが、19 世紀中頃に初めてジプシー巡礼者についての報告が登場し、毎年 5 月 24 日にサラ像が教会の外へと運びだされ、ジプシー従者に伴われながら海へと行進するようになったのは、20 世紀初頭からのことである。

状態になっているのである。

4. 異種混交的な共在の空間へ

加えて興味深いのは、ペンテコステ派であれカトリックであれ、マヌーシュが束の間の旅を契機に向かう「外部」とは、実は彼らが普段アクセスできない「フランス社会の内部」である可能性だという点だ。最後に、この点について簡単に述べておく。

かつては移動生活の主要な動機であった経済活動の機会が減った今日、むしろ活発化しているのは、単純な気分転換、つまりヴァカンスとしての旅、および、カトリック巡礼とペンテコステ派信者集会などの移動を伴う宗教活動だ。一見すると、後者の旅は、信仰にもとづく新たな共同体形成という境界が固定的な集団枠――明確な体系と主義に支えられた共同体――を形成する旅のようにみえるのだが、実態としては、前者の旅とその内容が区別できないものとなっている。つまり、彼らは、信仰の重要性を訴えながらも、「ヴァカンス」を楽しむツーリストのように束の間の旅を享受しているのだ。

たとえば、あるマヌーシュ家族は、2018 年 8 月後半、ペンテコステ派集会に行くために、フランス北東部の町までキャラヴァンで 3 日かけて出かけていった。そして 10 日ほど信仰集会に参加したのちに、シャンパーニュ地方でワイン用葡萄収穫の仕事に向かった。さらに、11 日間の季節的農作業を終えると、次はパリに向かい、ディズニーランドで 1 日大人も子どもも遊び、それからまた 3 日かけてポーに戻ってきたという。ポーへの帰着後翌日、家長の男性はこの約 1 か月間に及ぶ旅について、筆者とポーに残っていた親族にとても愉快な様子で語った[27]。

すでに触れたように、信仰実践を主要な目的とした旅のなかに、信仰以外の様々な活動を加えていくことは、カトリックのマヌーシュのあいだにもみられる。筆者は 2015 年 5 月の「ジプシー巡礼祭」開催の時期にポーのマヌーシュと共にサント＝マリー＝ドゥ＝ラ＝メールを訪問しているが、ここでも、巡礼は、信仰のみならず、経済活動や家族再会や娯楽の機会ともなっていた（左地 2017c）。また、フランス国内外から多数のジプシー巡礼者と非ジプシーのツーリストが集まるこの巡礼祭では、ポーという定住地での日常とは異なる他のジプシー集団との関係、そして非ジプシーとの関係も生じていた。マヌーシュは、巡礼祭に華やぐ町のなかで、他地域から来た様々な出自のジプシーと会話し、共にキャラヴァンを並べ、さらに、巡礼祭を見学するためにやってきた非ジプシーのツーリストともときに同じ宿営地に滞在し、言葉を交わしていたのである。

このように、マヌーシュの旅の実践は、たった一つの目的や共同体を目指すものではない。むしろ、そこには諸種の動機や関心が雑多に入り混じり、異種の人びと、たとえば、出自を異にする様々なジプシーや移動生活者、非ジプシーのツーリスト、地元住民、商人、農民などとの偶発的な出会いと共在の機会が生起する。もちろん、こうした非日常的な旅の空間における様々な他者との交わりや共在を、単純に融合や共生という言葉で語ってしまうことには注意が必要だ。しかし、少なくともマヌーシュは、旅を実行することにより、ポー地域での日常のなかでは出会うことのない人びとと出会い、定住地とは別種の空間のなかで彼らと共在する。この空間は、「マヌーシュ村」として形成された空間の外部にあるような「フランス社会の内部」にたち現れるものである。そして、この旅の空間のなかに可能性として潜在するのは、「である」ことという同一性――出自や信仰やその他の属性の同一性――に閉じられた共同性ではなく、むしろ、目的や帰属の同一性を問わない雑多な人びとが「共にある空間に投げ込まれる」（マッシー 2014（2005）: 266-269）という非同一的で偶発的な共同性の経験であるはずだ。

この共同性は、通常、何らかの目的や属性を共有する成員の集まりとして考えられがちな共同体のそれとは異なり、目的や帰属の同一性を前提としない人と人の結びつきの一種である[28]。そしてそれゆえ、「共にある空間に投げ込まれる」こと、その新たな出会いには、新たな衝突や排除の可能性が潜む。サント＝マリー＝ドゥ＝ラ＝メールの教会やカフェや宿営地で、マヌーシュは目的や出自や属性を共有しない雑多な人びとと出会い、共に祈ったり、音楽を楽しんだりして非日常の祝祭空間を享受することもあれば、不和や諍いに直

27　2018 年 9 月 12 日聞き取り

28　この種の共同性の概念は、フランスの哲学者 M. ブランショと J=L. ナンシー、イタリアの哲学者 G. アガンベンを代表とする論者によって検討されてきた。筆者のいう共同性もそれらと関わるが、概念の異同を含めた詳細な議論は、稿を改めて行いたい。

面したり、排除を経験したりすることもある[29]。この共在の空間は、混沌としていて不確実性に満ちているのであり、新たな社会関係や日常とは異なる別様の居場所を開拓するチャンス（chance）[30]と同時に危険ももたらすものである。マヌーシュは、ポーのマヌーシュ共同体という共通の社会的経験や生活条件にもとづく共同体の外にある、何の予定調和もなく、チャンスとリスクが混在するフランス社会内部へと出かけていくのである。

以上の点に関しては、さらなる検討が必要であろう。しかし、現時点では本章の議論を次のようにまとめることができる。バリエールをはじめとする「マヌーシュ村」の人びとは、「マヌーシュ村」という「地域社会の外部」にさらなる「穴」、つまり共同体内外の関係を可動させる〈動き〉の余地をあけている。そして彼らがその旅の実践を通して向かうのは、信仰やその他の属性の同一性で閉じられた共同体なのではなく、「マヌーシュ村」の日常では切り離されてしまっている、ジプシー、非ジプシーを問わない多様な市民たちからなる共同体としてのフランス社会の内部であるかもしれないということだ。

Ⅵ　おわりに

本稿では、定住化をめぐる社会変化の只中でマヌーシュが編みだす共同体の様態と移動の実践を追いながら、西洋定住民社会の内部を生きてきたノマドが、不確実性に満ちた環境にたいしてとる構えについて検討してきた。最後に、全体の議論を振り返りつつ、マヌーシュが紡ぐノマディズムという「動きのなかの生」のあり方について考察したい。

最初に、ポー地域におけるマヌーシュ共同体形成の過程を辿り、マヌーシュが非ジプシーという他者が管理し、ルールを定める不確実な環境のなかで、定住化をめぐる社会変化を生きてきた様子を明らかにした。定住化が進むなかでマヌーシュは、定住民社会が彼らに割りあてる居住地にとどまることを余儀なくされ、みずからが選んだわけではない隣人と共住することになった。しかし、その過程においても、彼らはメンバーシップの境界が流動的な共同体を維持することで、ゆるやかな地域的まとまりをつくりあげ、なおかつその境界を変動させ続けてきた。共同体の境界を可動的に保つことは、環境の変化に対応した新たな社会関係と居場所をその都度みいだす術でもあり、そうして彼らは、こうでしかありえないという必然性なく、偶有性を孕む共同体を生きてきた。

だが、2000年代後半から、そのような捉えにくい共同体を一つの領土に閉じこめていく統治のプロセスが、居住政策を通してポー地域で展開していった。マヌーシュはここでも再び、みずからが決めたわけではない政策決定のもとで移住を促された。そしてその結果、彼らが共同性を維持していくために必要としない「村」を与えられ、地域社会内部の異質な外部に集合的に隔離されることになった。

しかし、最後にみた「マヌーシュ村」内部の人びとの実践では、定住民社会による管理の空間として割り当てられた居住地にとどまりつつも、不確実な未来に向けて共同体の境界を可動的にしていく試みが生じていた。適合住宅という新たに得た拠点から束の間のヴァカンスや親族訪問や巡礼に出かけていくBT家の人びと、適合住宅への移住を拒否したり、改宗を通して新たな世界へアクセスしたりして、旧来の地縁共同体内外の社会関係を複数化、有限化する人びとがいた。彼らの旅の内容や目的は多様である。しかし、いずれもそれらは、共同体主義というイズムで固定化された共同体の境界を揺さぶり、共同体内外の関係の束の組み換えに繋がる〈動き〉をもたらすものだ。そもそもポーのマヌーシュ共同体ははじまりからして偶有性を抱えていたわけであるが、こうして今も、彼らは既存の共同体の境界やそのメンバーシップの要件、それらを固定化するイズムを越えていく、あるいは偶有性のなかで揺さぶる実践を編みだしている。

このように境界を可動させながら暫定的なまとまりをなす共同体に働いているのは、日常の生活条件に応じて集団の枠組みを変化させる「柔軟性の原理」である。それは、目指されるべき全体や未来を想定し、それに向かうという意味での戦略でなければ、外的環境から自律的で内的に閉じた主義や体系でもない。むしろ、非ジプシーからなる定住民社会という他者が支配する不確実な世界に寄りそうための〈動き〉を産出する原理であり、偶有性という「別様であるかも／あったか

29　この点に関しては、左地（2017c）に詳しい。「ジプシーと非ジプシーの融合の物語」を強調するジプシー巡礼祭であるが、町中のホテルをツーリストが占拠するのにたいし、他地域からキャラヴァンでやってくるジプシーは町周縁の宿営地を割り当てられる。また、地元のジプシー以外の一般の巡礼者は、巡礼行事において特別な役割も与えられない。こうした町と教会の対応、そしてカメラを構えて殺到し「ジプシー」を見物するツーリストには、ジプシー／移動生活者側からの非難の声も挙がっている。

30　このチャンスという概念（邦訳では「偶然性」）は、地理学者D. マッシーに依拠している。マッシーは、ある時空間に様々な人間や非人間が「共に投げ込まれる」という「予期せざるものとの遭遇」（マッシー 2014（2005）：217）が、空間のチャンスなのであり、「混沌、開放性、不確実性の諸要素を具現化する」からこそ、空間や場所は「民主主義の圏域にとっての潜在的に創造的な坩堝」（マッシー 2014（2005）：286）になると指摘する。

もしれない可能性」に開かれている。

つまり、同一性やイズムの維持ではなく、別様でもありうることへと開かれながら共同体をつくり変えていく、これがマヌーシュという西洋社会内部のノマドがとる不確実な世界にたいする構えだということができる。共同体を動態させつつ偶有性を保つことは、みずからの関与の余地なく常に変化しうるガジェという他者の世界を生きていたマヌーシュにとって必要な生存技術だともいえる。居住政策を含め、ガジェが打ちたてる制度はたびたび変化するが、それがいつどのように変化するのか、マヌーシュは知らない。いつ居住地が解体、再建されるかも、また政策がどのように変化するかも、彼らは知らないし、予期することも難しいのだ。実際に、新市長の誕生はそれまで停滞していた適合住宅政策を動かし、彼らが予想しなかった結果へと急激に導いた。マヌーシュにとってガジェのルールが支配する世界は常に別様でもありえ、不確実性に満ちている。こうした世界を生きぬくため、彼らは〈動き〉の余地をつくりだすことを続けるのだともいえる。

ここから、マヌーシュと定住民社会との関係を次のようにまとめることができる。マヌーシュはガジェからなる定住民社会を他者として明確に区別するが、彼らのノマディズムと共同体は彼らの外部に定住民社会があることにより生みだされる。彼らの〈動き〉は、領土化のプロセスと連動し、切り離しえないものである。不確実性に満ちた世界は、単一化と領土化のプロセスを生成すると同時に、そこからはみ出す運動をも産出するといえよう。マヌーシュは、宿営地再編や適合住宅や村の割り当てという定住民社会の側が定める制度や条件を受けとめ、それらとの縺れあいのなかで、ノマディズムと共同体をめぐる〈動き〉を紡ぎだすのであり、そこにあるノマドと定住民社会の不確実な世界にたいする構えの関係は単純な対立や否定ではなく、応答や連動という絡みあう関係である。

このように定住民社会の領土と制度のなかにあって、みずからの共同体の境界を動かし続けるマヌーシュの姿から、リスクに対する独自の向きあい方がみえてくる。リスク管理を制度化するリスク社会とはそもそも未来を予期することができる、問題のありかを突きとめてそれを解決することができるという前提にもとづく。たいして、マヌーシュは未来が予期できる、リスクが管理できるとは思っていない。したがって、彼らは環境に潜む不確実性を制御するのではなく、不確実な世界のなかで〈動き〉を保持することを選ぶ。メンバーシップの境界を定め、社会関係を安定化するという共同体のリスク管理ではなく、みずからの「今、ここ」の共同体を動態的なものにし、偶有化する、つまり「他でもありえた」、そして「他でもありうるもの」にするという「反−リスク管理」の方法をとる。「今ここではない別のどこか」への接続の機会をうかがいつつ、共同体の境界を揺さぶることで、マヌーシュは不確実な未来に向きあうのだ。

環境に潜むリスクを管理するのではなく、〈動き〉を通して不確実な世界に身をそわせること、このことには、危険と共に創造の契機がある。キャラヴァンをとめることが許されている「マヌーシュ村」を離れて旅に出ることは、マヌーシュにとってチャンスでもあり、リスクでもある。マヌーシュは、新たな社会関係を開拓し、別様の居場所を地域外にみいだすことができるかもしれない。しかし、その「マヌーシュ村」外部であり、フランス社会内部であるところにおいて、彼らは新たな不和や対立、そして排除を経験するかもしれない。ノマディズムの実践を通して彼らが足を踏み入れるのは、そのような危険と、まだみぬ、あるかもしれない共同性の可能性が満ちる世界である。

以上のように、本稿では、不確実性の統御ではなく、別様でもありうることへと開かれながら動き、共同体をつくりだすマヌーシュの構えについて検討してきた。彼らにとって、不確実な世界を生きぬくためには、「私たち」の境界を固定するのではなく、動かし続けることが有効である。そうしてマヌーシュは、定住民の領土や制度から逃走することなく、そこにとどまりつつ、偶有性を孕み動態する共同体を生き続ける。彼らは、みずからが生きる共同体とノマディズムに絶対的なイズムが不要であることを直感的に知っている。しばしば、ノマディズムは、外部社会への抵抗やそこからの逃走、あるいは自由な根無し草状態として表象される。しかし、マヌーシュの「動きのなかの生」としてのノマディズムに、そのようなロマンティシズムを重ねることは不適切だ。

マヌーシュは、西洋定住民社会のなかで、その社会的、経済的、文化的資源に依存し、かつそれらを活用しながら生きてきたノマドである。外部社会にたいして抵抗したり逃走したりして、内だけで閉じていては彼らの生き残りは不可能であり、むしろ内破ともいうべき外部への浸透を必要とする。マヌーシュのノマディズムと共同体は、非ジプシーという他者の不確実な世界に寄りそうという他律的な原理にもとづいて変動しつつ維持されてきた。諸種の政策が実行されるなかでマヌーシュの共同体は既存の共同体外部の他者を受容しつつ、融合と分散を繰り返して変動してきたのであり、人びとは割り当てられた居住地を出発点として、チャンスとリスクが混在するフランス社会内部へと出かけていく。こうしてマヌーシュは、定住民社会の予見不可能な世界に根をはり、そこでその都度もたらされる社会的条件を受けとめつつ実現可能

なノマディズムと共同性を模索する。彼ら西洋ノマドの存在は、ノマドにルーツを認めない定住民社会の意に反して、定住民社会が絶えず内にノマドを抱え、新たに生成するということを示唆するといえよう。

マヌーシュの生き残り戦術としてのノマディズムは、絶対的なイズムへと収斂することなく、環境に寄りそいながら、みずからをとりまく境界を揺さぶる、あるいは越えていくための〈動き〉の余地を生みだすことに特徴をもつ。定住民社会の領土の外へと立ち去る、あるいは居場所をもたないという意味での "dislocation" ではなく、その領土に依拠しつつ、〈動き〉のなかでその潜在力を活性化させ、変容や異質性に開かれた居場所（location）を創出すること、それが彼らの「動きのなかで生を織りなす技法」としてのノマディズムである。しかし、生の流れを固定化する絶対的なイズムに抗い、「私たち」の境界を動かし続ける構えとは、マヌーシュという西洋ノマドだけのものだと果たしていえるだろうか。増大するツーリストの一方で、移民、難民、被災者、避難民といった「移動する人びと」の存在に揺らぐ現代世界、不確実性の制御にまつわる矛盾を抱えたリスク管理社会の現状からみると、イズムなきノマディズムは人類にとってアクチュアリティある環境にたいする構えといえるかもしれない。

謝辞

本稿のもととなる研究は、JSPS 科研費 17K13585 の助成を受けて実施した。また、本稿の執筆に先立って、2018 年 3 月 3 日に南山大学で開催された公開シンポジウム「不確実な世界に住まう――遊動／定住の狭間に生きる身体」（南山大学人類学研究所主催）では、コメンテーターの中谷和人氏（京都大学）、東賢太朗氏（名古屋大学）をはじめ、参加者の皆様から貴重なコメントをいただいた。記して感謝申し上げます。

参照文献

東　賢太朗、市野澤　潤平、木村　周平、飯田　卓（編）
2014　『リスクの人類学―不確実な世界を生きる』、世界思想社。

海部　陽介
2005　『人類がたどってきた道―“文化の多様化”の起源を探る』、NHK ブックス。

左地　亮子
2016　「ジプシー」をめぐる政策の人類学試論―ノマド、移動生活者、ロマに対するフランスの法政策の分析を中心として」『文化人類学研究』17: 91-107。
2017a　『現代フランスを生きるジプシー―旅に住まうマヌーシュと共同性の人類学』世界思想社。
2017b　「フランスにおける移動生活者のための「適合住宅」政策―居住福祉を通したマイノリティの社会的統合の試み」『居住福祉研究』23: 49-61。
2017c　「ジプシーの共同想起なき記憶行為と時間の経験―南仏ジプシー巡礼祭に織りこまれた迫害の記憶と隔離の空間をめぐって」『Contact Zone 2017』: 34-71。
2018　「物語化に抗する沈黙とアーカイヴ―フランスのジプシー共同体における二種の記憶行為をめぐる考察」『Contact Zone 2018』: 240-275。

里見　龍樹
2017　『「海に住まうこと」の民族誌―ソロモン諸島マライタ島北部における社会的動態と自然環境』、風響社。

ドルティエ、ジャン=フランソワ
2018　『ヒト、この奇妙な動物―言語、芸術、社会の起源』鈴木光太郎（訳）、新曜社。

西田　正規
2007　『人類史のなかの定住革命』（講談社学術文庫）、講談社。

ハラリ、ユヴァル・ノア
2016　『サピエンス全史―文明の構造と人類の幸福』（上・下）、柴田裕之（訳）、河出書房新社。

ベック、ウルリッヒ
1998　『危険社会―新しい近代への道』東廉、伊藤美登里（訳）、法政大学出版局。

マッシー、ドリーン
2014　『空間のために』森正人、伊澤高志（訳）、月曜社（Massey, Doreen B. 2005 *For Space*. Sage.）。

メイヤスー、カンタン
2016　『有限性の後で―偶然性の必然性についての

試論』大橋完太郎、千葉雅也、星野太（訳）、人文書院。

CNCDH（Commission nationale consultative des droits de l'homme）
2014 *La lutte contre le racisme, l'antisémitisme et la xénophobie* - Année 2013.

Sachi-Noro, Ryoko
2017 Decline and Restructuring of Gypsies' Nomadism in France: Beyond the Nomadic/Sedentary Binary. In *Sedentarization among Nomadic Peoples in Asia and Africa*（Senri Ethnological Studies 95）. Kazunobu Ikeya（ed）, pp. 87-116. Natioanl Museum of Ethnology.

Scott, James C.
1998 *Seeing Like a State: How Certain Schemes to Improve the Human Condition Have Failed.* Yale University Press.

Sutherland, Anne
1986 *Gypsies: The Hidden Americans.* Waveland Press.

Williams, Patrick
1984 *Mariage tsigane: une cérémonie de fiançailles chez les Rom de Paris.* L'Harmattan.

新聞
La République des Pyrénées. 2015 年 2 月 21 日 .

La République des Pyrénées. 2018 年 3 月 2 日 .
オンライン記事 .
URL: http://www.larepubliquedespyrenees.fr/2018/03/02/voici-les-nouveaux-logements-adaptes-pour-les-gens-du-voyage-a-pau,2293070.php（最終アクセス 2020 年 1 月 6 日）

Living in Uncertain Worlds:
The Bodies Living between Nomadism and Sedentarism

Ryoko SACHI*

European Gypsies/Roma, traditionally known as a nomadic ethnic group, are leading a largely sedentarized lifestyle these days. Similarly, French Gypsies-Manouches, called "*gens du voyage*" ("Travelling people"), experienced this sedentarization process after World War II and especially in the past several decades. It seems that they decide, either out of choice or necessity, to become sedentary rather than constantly moving on. However, it should also be noted that the Manouches resist total assimilation, keeping their camping trailers at settled homes in order to travel a few times a year. Why does it matter in this day and age for the Manouches to keep "moving"?

This paper aims to present the basic attitudes of French Gypsies toward uncertain environments by examining the cases of Manouche families living in the Pau Region in southwestern France. As a nomadic people in a Western industrialized nation, Manouches live in environments where they have no control, while the rules and laws of the majority sedentary population are always ingrained onto them and they are expected to abide by them. Moreover, as the sedentarization leads to the concentration of Manouches' caravans proceeding at an accelerated pace in the marginalized suburbs, Manouche families have faced difficulties in reconstituting their social organization, which is closely linked to nomadism. In particular, the residential segregation has affected their community characterized by its ability to adapt to changes. Following this context, this paper illustrates how "engendering moves" became an important means of survival for the Manouches. They travel to temporarily leave their settled residential homes to enter other areas, shaking the boundaries of their community which have been affected by the ghettoization and the enclosure of their caravan sites and houses. "Moving through uncertain environments", this "nomadic" approach to the world is dramatically different from existing sedentary societies, which is often based on the identification of risk and control of uncertainty.

Keywords:
Gypsies, Manouches, nomadism, uncertainty, community

*Toyo University